

我負と言者あり。然るに誤りて勸むる人あるを幸に破齋し。飲酒食肉すること亦哀しからずや。親子の至て親しきすら苦に代ることあたはず。況や他人をや。本願經の明文三藏の金言にて迷ひを改むべし。又世間の人多くは小惡を輕んじて數々作りて罪なしと言。小善を輕して功德なしとて捨つ。大なる愚癡なり。持律の人を見ては小乘の戒なり何ぞ持せんとて捨て毀る。其の實を檢すれば不信放逸にして如來の制戒を守ることあたはざるあり。さらば餘の大乗の行あるかと檢するに。肝て興晏く食して。群り集つて諸欲の境を談話して慚愧あることなく。禮佛誦經坐禪學問は廢れはて。筆硯に塵垢かく。書籍に蠹屯す。堂の内には鼠の糞沙の如く。佛の前には萎める花芥の如くなるをも顧みず。或は園岩て日を昏し。或は酒を飲みて夜を白す。甚だしき人は博奕するあり。此を大乘の行といはゞ。一切世間の愚童凡夫誰か大乘の行人ならざらん。悲んでも猶餘りあり。關尹子に曰く勿レ輕ニ小事ニ小隙沈レ舟勿レ輕ニ小物ニ小蟲毒レ身と俗士すら猶小事を輕せず。況や沙門をや。又易日善不積不足ニ以成名。惡不積不足ニ以滅身。小人以ニ小善爲レ無レ益而弗レ爲也。以ニ小惡爲レ無傷而弗レ去也。故惡積而不可掩。罪大而不可解。文今時の人皆な是れあり。小善をば益なしと言て作さず。大善は猶作すことあたはず。さらば小惡をもさぬかと思へば所有惡事作すと云ことをし。儒士すら既に是の如くいへり況や釋氏として慎まざることを悲

か痛かな。又儻人目を愧る人も。陰にては諸惡を作して人知すと思へり。知らずや人間の私語天聞こと雷の如く。暗室の欺く意ろ神目ること電の若くなることを。況や俱生神ありて。人生る、と同じく左右の肩の上に常に住して。我が念々作々の善惡を記すをや。又莊子曰爲ニ不善乎顯明之中者人得而誅之。爲ニ不善乎幽暗之中者鬼得而誅之。文人に知らしめずして惡を作る者は。鬼神討するが故に種々の災殃のみあり。自ら省みて慎むべし。又小善をも輕しむべからず。本願經に一毛一沙一塵毫髮ばかりの善根もあらば。地藏菩薩漸く度し玉ふべしと誓ひ玉へり。又花嚴經に人の金剛を飲む喻を説く。儒釋道異ありといへども。趣き同じきこと頗る多し。慎しむべし恐るべし。省み修せずんばあるべからず

◎第九十貳 幽靈現へれて回向を望む事

播州姫路の町に大原屋次郎太夫と云信士あり。常に眞言を念誦し持齋など勤めて。淨信決定の人なり。天和年中に高野に詣せんとて。一人の僕を具して登りける因みに。河内小西見村延命寺へ來りて我が親族の亡者に追福を頼けり。淨嚴和尚光明三昧を修して回向せられければ其夜播州の親族の夢に法事のありさまを見。死せし女人喜悅の色を含みて。我高僧の回向に依りて今諸苦を免れたり。憂慮することなかれといへり。又大原氏具して來

りし僕。夜起て人と言及び相撲とる様なり。大原氏目覺て問何事ぞやと。僕の曰く予が朋輩三年已前に人と口論して人に斬れけり。其者今大井より篋に乗りて下りて曰く。我れ餓鬼趣に墮して苦しみ無量あり。今先我に食を與ぬよ。又今善き處へ來れり我爲に回向を頼み奉れど。いろ／＼に誨さけるを。我肯はず組合侍るなりと。大原氏も其の幽靈の聲を聞けり。伽子翌日昨夜の暫くも眠らざる由をいへり。次の日は高野に登るとて。紙谷の宿に泊りけるに。又彼の靈來りて種々に誨さけり。高野に宿せし夜は來らず。結界の地なる故あるべし。歸るさに河根に宿するに又來りぬ。次に小西見に宿するも又同じく來りて種々に頼みしを。彼の伽子慈愍なくて終に回向を請まさりけり。彼大原氏彼にの出家して印空觀明と号して延命寺に住す。曾て此事を予に語りけり。又印空未だ出家せざりし時弘法大師の尊像を安置して供養しけるに。夢中に度々汝早く河内小西見へ行き出家せよと告玉へり。其外種々の靈異を得たれども。謹愿の人にて明りに人に語りざりけり。されば本願經の所説の如く經呪を誦して亡者に回向すれば。必ず苦患を免る、こと一も虚妄にあらず。又亡者も回向を望むこと昔しより今に至るまで例し多し。心あらん人は有縁無縁によらず回向すべきなり。○中古高野山明王院の太神宮へ參詣して宮川の邊りを通られけり。人を葬する見へければ。肩輿の中にて持戒清淨の印明を結誦して。回向せられけり。

其の夜其の亡者其の子の夢に見て曰く。我れ今日高野山の回向に依て。苦趣を脱して淨土に往生せり。汝ら必ず高野に登りて厚く恩を謝し奉れと告たり。此事古き記録に載て正しき事なり。電覽日久しければ書の名をば忘れたり。且つ回向を望むども。持戒の珠域なく。觀念の月圓なる人に請をばます／＼善るべし。心佛衆生三平等の理に住して回向する時は。我が誦する眞言は即ち亡者の誦するなり。乃至我が所修の功德とて。十方法界の一切如來の三無數大劫の所修の功德と一切の三乘の賢聖の所修の功德と。平等一如にして共に亡者の功德となるが故に。速疾に天及び淨土に生ずるなり。宜あるかな高野の阿闍梨の回向を喜び。延命寺の和尚に追福を望むこと。されば回向の中には眞言の力最も勝れたり。寶篋印陀羅尼。尊勝。隨求。大佛頂。光明眞言等の經の中に明かに説が如し

◎第九十三 讚岐の人回向を蒙りて他化自在天に生ぜし事

延寶七年の春。吾が和尚讚州高松に高居して。梵網經を講じ玉へり。爾時に西濱の人我が父の百个日に了りて。精米若干升。青鳧若干緡を持來りて。追福回向を請けり。和尚五六口の伴僧を帥て。大隨求陀羅尼一七遍誦して回向し玉へり。予も其の席末に居して同じく誦せり。其夜彼者の夢に。死せし父美麗なる珍服を着て。面てに喜悅の色あり。子に告て曰く。我今日高僧の回向を蒙りて。他化自在天に生ぜり。喜ぶべしと。彼者踊躍して明

日即ち吾が師の所へ來り。しかくくの由を語りて。禮謝しけり。此事予面豈聞しかば。殊に記するものなり。寔に眞言陀羅尼は。醍醐の妙藥にて。現當の利益を得ること速疾なり中にも。大隨求は。極重惡人も。此を帶して守りてすれば。一切の罪障消滅して必ず。天に生ずべし。若し心を致して供養すれば。必ず極樂淨土に往生すと説玉へり。凡そ自ら經を誦じ佛名を唱ひてこそ。淨土に生ずる法なるに。密乘の諸乘に超過せるは是あり。自ら誦するにあらざれども。唯守りとして禮拜供養するは必ず往生し。又は他人の回向を受。又は如持土沙の結縁を得るに。地獄頓に破れて淨土に往生すること。奇が中の大奇妙なり。佛説既に疑ひなきに。又現に生天の靈應あるをや。信せずんばあるべからず。他人の回向を受るすら猶天に生ず。況や自ら讀誦せんをや。

●第九十四 兄みを殺して現報を受る事

河州丹南郡太井村に善兵衛と云者あり。兄二人あり。其中子性惡くて人に害多く。父母にも不孝なりければ。兄弟俱に憎みけり。寛文の末に少しの惡事ありしに托して。兄弟二人圖りて中子を殺せり。其より彼の弟善兵衛狂人の如くになりて。西に向て立ちやい／＼と呼ぶ。人其のゆゑを問へども答へず。晝夜を分たず呼びけり食物も常の如く言語も居常に異ならず。只やい／＼とよぶのみ病なり。其聲太はだ高くして四十町あまり聞へけり。高

僧等來りて種々に諭し。念佛誦呪を勸むれども聞入れず。狂人の如くなれども亦狂せるにあらす。後には漸く聲も下くなりぬ。人其の呼ぶ因縁を問へば曰く。我兄と共に殺せし兄船に乗て來るを見に。此の處即ち變して大海と成る。我即ち海へ沈むが故に其の船の兄に我を救へとて呼ぶなりと。言も訖す早今海に沈むぞ。やい／＼と呼けり。此より外の事はなし。年を経て後其聲も漸く下くなりぬ。予延寶三年の春小寺村に居して。其の聲を聞けり。其後程なく死しけるとなん。是彼が兄に酬はずして弟に酬へり。兄として若し弟に大過あらば殺すべき理もあるが故なるべし。弟として兄の罪過大なりと殺すべき理なければ。現に報ひを得たるならん。兄には我が父の如く事ふべきに。却て殺せるは逆罪と同じければ。現報を得たること亦宜ならずや

●第九十五 犬を殺して生身に犬となりし事

泉州忠岡村は作藏と云者あり。堺邑の松屋の作右衛門が力となりて久しく仕へけり。或人赤犬の心は妙藥なりと云を聞て。即ち赤犬を殺して。食へんとす。犬を捉へて四辻の井の中へ擲入。竿を以て撞殺して。終に其の心を取て食せり。食して後身心忙然として醒まひの如くになりぬ。即ち忠岡にかへり。家兄の所へ往て場の隅に踰躪する。嫂婦。善く來り玉へり是へとて座敷を開きて呼ぶも答へず。唯犬の如くに場の隅にうづくまれり。家兄怪

しみて思はく氣色あしく座敷へは上らぬならんと。即ち食物を與ふるに手に取りて即ち場へ寫して。自ら口吻をさし付て食ふこと犬に異なることなし。親族仰天して左右せしかども力及ばざりけり。其より終に人語あることなく。べうくどのみ吠て形も犬の如くなり。食物は必ず土の上に寫て食しけり。後に吾孫子の豊中村に來りて。晝は野邊を獨り歩みて糞あれば即ち食ひ。夜は常福寺の門前に臥す。羣犬の中にあれども餘犬怪しみ吠す。二三年を経て万治二年九月十五日に野邊にて死しけり。法名道喜と号す。正しき事あり。○近比大坂に夫妻あり。妻久しく煩ひて痊べくも見へざりけり。或人來りて曰く。此の病には赤犬の心を食すれば即ち平愈すと。其の家に赤犬あり。此の語を聞彼の人の顔をつらく見て。即ち何方ともなく失けり。彼の人懼れて曰く。我赤犬の心こそ藥なりけると言しを彼の犬聞て去りぬ。定めて路にて待て我を食殺さんと思ふなるべし。唯し此病には雉の鳥を食てもよし。赤犬には限らぬ。我獨り歸ることあたはじとて。二人伴なひて歸りけるに路には待てをらず。二三日が程其犬往方知れずありぬ。四日を経て彼犬歸りしに。雉の鳥を一羽銜み來りて。主人の前に置て甚だ疲れて臥しぬ。主人悦び感して曰く汝畜生にはあらず。先日客の言を聞て此の雉を取り來れるならんとて。犬を撫摩食を與へければ。四日の間食せざれば甚だ疲れたる體にて臥しぬ。さてそろく力付て初の如くに

なれり。彼男其雉を妻に食せしめずして我が知己の方へ餽りけり。其後妻が病ひ重くありければ。彼の犬を賺しすまして殺し心を妻に食はしめたり。其日より彼男僕ひ付て二三日病て死しぬ。其妻も亦病いよく重りて犬の如くにあり。口ばしりて曰く。初より我を殺さんことは能く知れり。故に此雉を取り來りぬ。雉を取り來ることかりそめの辛苦にあらす。晝は他所の犬に責らるゝが故に忍び伏して夜々ひそかに銜み來れり。然るを我が志をも省みず情なく殺さる。我何ぞ怨を酬ひざらんとて。終に其の妻も死しぬとぞ。此又正しき事なり。其町其人の名も聞しかと今は忘れたり。肉を食するものは大慈悲の性種子を斷と佛は誠め玉へり。中にも心を食ふことあかれ。心は神靈窟宅なればますく罪深しと。唐の高僧は教をのこせり。朝露電光の命を養はんが爲めに。阿僧祇耶長時の苦しみを招き。現にもかく醜名を流布す。悲いかな飲めや。○第九十六 犬能く人の語を知り人の恩を知る事 河州に一りの浪人あり。家犬を養けり。或年の冬塚の人來りて犬を買ふに錢六百文に賣ぬ。彼の買者の曰く我捉へなば定めて食付べし。捉へて與ぬ玉へと。主人犬に近付て曰く。我貪乏逼りて命を續ことを得ず。故に汝を賣りて直を得たり。必ず彼の處に至りなば逃て歸れ復汝を賣らんと。人言如くに言て捉へ縛りければ。居常は猛き犬なれどもやす

くど縛られけり。犬買奉て歸りぬ。然るに其の夜彼の犬逸て歸れり。主人悦びて食物を與ひけり。さて五七日経て後に又彼の犬買來りて犬を望みしに。今般は與ふまじき道理なるを。又錢を與ふべく言ければ。主人欲心發り繩を持って犬の傍によると。犬即ち主人が亢に食付て殺しけり。それ犬は人近き獸なれば能く人語を聞き。人の恩を知り。人の邪正を知る。故に此の怨を報ひたり。昔陸機が犬を黃耳と云。書簡を結付て數百里に使价せしむるに。能く往來して返簡を取り來るといへり。又智度論に曰く佛舍利弗と共に乞食し玉ふ舍利弗一鉢の飯を以て佛に供養し奉る。佛受て即ち狗に施し玉ふ。而も舍利弗に問玉はく。汝は我に供す。我は狗に施す。是の功德何れか勝れたるや。舍利弗の曰く佛に施し玉ふ功德甚大なり。佛の曰く善哉汝が所言の如し。慈心を以て餓狗に食を施すは佛を供するよりも勝れたりと取意されば佛は三界天人の所供養をれば乏しきことなし。餓狗は現に苦しみて救ふ人なし。故に勝れたり。又涅槃經には比丘の牛羊象馬驢猪狗等の鳥獸を養ひ畜ふことを戒め玉へども。薩婆多部律攝には。大寺の内に盜賊を防んが爲に犬を養ふことを許し玉へり。又高野明神は犬を眷屬とし玉ふ。神明の所使なれば叩りに殺し。叩りに打擲すべからず。又江戸の風俗犬は不動明王の使者ありといへり。經論の説なしといへども昔しより言ならはせること。定めて憑據あるか。又犬は行者の殘食を食せ

る故にや。上古より神僧の犬を愛し養へること例し多し。僧史の中に見へたり。具に記することあたはず。○又昔し蘇入鹿大に兵士を集めて。上宮太子の屬を亡す時に播州に枚夫と云者あり。世々雄武の名あり。召れて軍に従ふ。枚夫妻あり若して姝好。枚夫が僕密通せり。後に枚夫歸る。僕事の露れんことを恐れて主に語て曰く。山中に一所あり猪鹿の集る所なり。諸人知らず只我のみ知り。願くは君と二人ひそかに往て獵せん亦快からざらんや。若し人に知らしめば君の有にあらじと。枚夫大に喜ぶ。枚夫は本より弓の上手なり。曾てより二匹の黒狗を養ふ。二犬と僕と山中に入ること四五里にして。僕弓を彎矢を架て曰く。我昔は君を主人とす。然れども君が妻我を夫として今君を殺さしむ。故に今敵あり。此山獵所なし我君を給ひて此に至れり。此の一箭に君が命を得べし。知らず君思ふ所ありや。我君が命を奪ふとも能く君が身後を濟んど。枚夫が曰く。甚か我が衰へたること。我未だ此事を知らず。餘は又何をか言んや。但一事あり願くは汝且く待と。枚夫腰に食を包みて帶せるあり。即ち二犬を呼て食を分て二として各與へて。二犬を撫てて曰く。我汝等を畜こと多年。愛すること子弟の如し。此の飯は是我が養なり。今汝等に與ふ。是一生の最後の食なり。我死せば誰か又汝等を養はん。我今死して後に汝二犬一時に我が屍骸を嚼で盡せ遺餘あらしむることあかれ。然るゆゑは我少壯より雄武の譽

を得て。蘇氏の軍に従へり。恥らく今僕隸の爲に給かれて空しく山中に死せん國人競ひ
 來りて我が屍を見て嘲り笑はん。是死後の大なる患なり。汝二犬必ず我が屍骸を食盡せど
 。二犬涙を流し耳を垂てき。其の飯を食はず。一犬高く躍て僕の持てる弓の弦を噛斷る
 。一犬又躍て僕の元を嚼で殺す。枚夫涙を流して二犬を牽て家に返り。乃ち妻を逐出し
 。親族を聚めて曰く我二犬に因て命を全ふせり。我子なし。今より二狗を立て我が子とせ
 ん。我莊田資財皆是二犬の有なりと。犬の壽は短促なれば犬幾ならずして死す。枚夫
 が曰く我向に二犬を以て子として資財を付す。今其れ死したりといへども前言變すべけん
 やと。即ち田賃を捨て、伽藍を建立し。千手大悲の像を安じて二犬が菩提を資け。二犬を
 祠て地主神とすと。此の像靈感日に新なり。野火四面に來れども伽藍恙がなきこと凡そ三
 度なり。桓武帝聞しめして官寺とし。田數頃を寄附し玉ふ。播州の犬寺是なり。寺は志昔し
 唐の慧安師の休懐を教へて二犬を養しめ。終に死難を免れしめしこと頗る相似たり。
 されば犬は能く人の語を聞知り。主人の恩を報ずることを知れり。餘の畜類の如くには思
 ひざるべし。

◎第九十七 犬を殺して現報を受し事

延寶の始大坂久太郎町の堺筋。長門屋の甚左衛門と云者あり。薩州太守の橋子屋なり。

家富て家内に三十人も住せり。然れども長者富にあかぬならひなれば。蠟燭を賣て利を貪
 びりけり。近處に白犬二匹あり。或夜ひそかに入りて蠟を少しはかり食ひけるを。大に瞋
 りて白狗を捕へ。居間の前にて殺さんとしけるに。犬吠さけびければ。隣家に福吉庄右衛
 門と云筆師あり。來りて曰く。かく吠るには口中へ灰を打ちみたるがよしとて。灰を多く
 打ちみて共々殺しけり。犬死する時に吠ることあたはず。二人をにらみつめて死せり。
 さて三十日餘を経て。甚左衛門二三日病みて即ち死せり。又七日を経て福吉氏も死せり。
 其後漸々に其家貧しくなりぬ。甚左衛門子を甚右衛門と云り。家業を贅で薩摩殿の橋子屋
 なりけるが。或時念を入れて造りたる肩輿を獻じけるに。故なくて摧け、れば。それより薩
 摩殿の轎子をする事もならず万事不如意になりもてゆきて。十年餘の内に家衰へて家宅
 を沽却しぬ。甚右衛門は住處もなく逐電して。今は茶店などして活命せりとかや。其子甚
 太郎は淨瑠璃かたりとなり活命あるかあさかの風情にて暮すとかん。○又大坂或町に圓
 清と云目醫師あり。其の借屋に居ける女房少年より油虫をさらひにくみて。常に熱湯を
 灌て是を殺せり。後に死する時身邊に無量の油虫生せり。をめきさきけんで曰く。やれ
 油虫がつ、さころすのて死せり。好で油虫を殺せる現報なりとぞ人皆な恐れかなしみけ
 り小蟲なりとてあをどりあは現報を受て後に悔ひべし。況や犬は能く恩を報じ怨を酬ゆる

獸なるをや。泉州及び大坂の事は無下に近きことにて。見聞せる人今尙現在せり。少しも虚誕にあらず。恐るべし慎しむべし

◎第九十八 蛇を害して即時報を受んとせし人の事

攝州河邊郡友行村に宗圓と云者あり。晝田へ往て鋏にて鎌まつて毒蛇を打殺せり。其の夜大熱病を受けて苦しみ臥しぬ。かつて養し僕久しく他所にありしが。其夜宗圓が家に忍び入りて場の隅に隠れ居て。人皆な眠らば物偷まんと思へり。月夜なるに水棚を見れば毒蛇の切れたるが。はひ來りて水壺の中へ入りけり。然るに宗圓は大熱を受けてあまりに喉渴さければ。獨り起て水棚に至り水を飲んとす。時に彼の盜人思はく。我今貪しきが故に偷盜をなすといへども。今宗圓が毒蛇に螫れんを見るに忍びずと。即ち出で、曰く其の水を飲玉ふことなかれと。宗圓驚きて汝何故に來るやと問ふ。彼の賊の曰く先づ火を然して見玉へとて。諸人皆起て火を然して水壺を見るに。宗圓が晝切りし毒蛇の半分來りて中まあり。諸人駭ろさ恐れて即ち又殺せり。宗圓が熱病も尋で痊ぬ。さて汝は何事よ來れるやと問に。彼者ありのまゝに語りければ宗圓も不便に思ひて呵嘖せしめて歸しけり。蛇は腹恨深き蟲なれば晝の怨を報ん爲に來れるあり。熱病も蛇の所爲なるべし今時の人毒蛇及び蜈蚣等を見ては。殺しても罪あし。昔し佛を螫しが故にと云て必ず。殺す。然も謬に。

はみ。のみ。しらみ。ねづみぬすみ。是を五味と号して殺す法なりといへり。是實に大邪見なり。天竺の外道の計に相似たり。無益の事をなして却て其の害を蒙るへし。釋書及び沙石集等に蛇の害をさせることを多く記せり。今は宗圓が事に於て見つ。是れ日者の事にてぞありける

◎第九十九 或人痘瘡の鬼を追出す事

江戸に東和田道瑞と云浪人あり。性なり卓犖にして射を善す。貞享年中に痘瘡流行りて人多く死しけり。或時道瑞出て夜を歸りしに。其の娘五六歳なるあり。俄かに熱して。乳母抱くに堪がたさばかりあり。乳母道瑞に言て曰く。令媛大熱出侍り定めて痘瘡なるべし。醫師は誰に見せ侍べらんやと。道瑞が曰く明日こそ醫師にも見せめ。比來痘瘡にて人多く死す。然れども我が弱息をば痘神も容易まは殺すことあたはじと終に寐ぬ。夜半過に夢に道瑞大に怒りて躍り騰るばかりあり。痘神に云て曰く。汝何ぞ我が子をばたやすく取んとする。今形を現して來れ。我汝が頭を一太刀に打破るべし。汝今形を現はさざるは豈鄙狹にあらずやと。其の時次の間より痘神六十ばかりの老父の形を現えて出で。頭を低手をつきて曰く。君怒り玉ふこと道理にて候。我們いかでか君の令媛をば殺すべきと其時に道瑞平生覺ゆる小刀を執て。柄に手をかけ忿て曰く。汝我が前に於て盟へ。若し向後

人の子を刃に殺さざらんか。若殺さば今汝が頭を碎かんと。痘神甚はだ恐れて向後人を殺さじと約しけり。道瑞が曰く然らば手形をせよとて筆硯を出すに。痘神即ち昏の隅に一つの符を書て曰く。若し此の符を持せる人あらば我れ必ず殺さじ。設ひ必死の人なりとも此の符を得ば。必ず平愈すべしと云て足早に走り去りぬ。道瑞夢さめて怪しみ乳母に問はく。弱息は如何んど。乳母今少し眠り玉へりと答ふ。道瑞も亦眠りぬ。夜旦て小女を問に熱さめて病瘵ぬ。乳母の曰く昨夜問玉ひしより熱さめ侍りと。道瑞夢の事を思ひ出して不思議と思ひ。彼の符を書て見るに記ぬたり。試に痘瘡を病者に與ふるも即時に瘵ること神の如し。其より多く人又與ふ。設ひ重くて今死ぬると云程の痘瘡も即時に瘵ぬ。予元祿二年の夏道瑞に判識して面峯り此事を聞き。其時に語らく。既に五百人に與るに一人も死する者なしと。諺にも鬼神に横道なしといへり。寔なるかな此の言。既に符を書て盟が故に永く約を乖かざるなるべし。道瑞は本より勇悍あり。又能く眞言を誦す故に痘神伏せられたるならんか。

◎第百 或人疫神に逢て談話せし事

遠州何の郡とかやに彌右衛門と云者あり。或所へ往て歸るに。道にて山伏と同道しけり。行々四方山の談話して或茶店に憩ふ。彌右衛門松巴及び酒を沽て山伏に羞むるに。山伏喜

びて食しけり。さて伴なひ行て種々の物語するに。彌右衛門問て曰く。公は何國の人に於て何の處へ往玉ふやと。山伏の曰く我は疫神あり。我が長の命にて某村の彌右衛門と云者を取に往ありと。彌右衛門驚愕て曰く某の我が事あり。何の罪にて取り玉ふぞや山伏撫然として曰く我の長の命にて行く。其の由を知ることなし。今日君が恩恵を蒙るが故に君が命を取ることあたはず。若し君が村に君と同年同日に生れたる人はなきやと問に。彌右衛門が朋輩に同年同日に生れたる人あり。それを教へければ山伏其の家に入りぬ。彌右衛門の家を歸りて。翌日彼の人の家に往くに。主人の昨日より風の心地にて頭痛發熱ある由をいへり。彌右衛門いよく不思議に思ひ相見するに。山伏も猶彼の人の背に住せり。彌右衛門を見て手を以て去と云勢をなせり。彌右衛門來れば彼の人の氣色よし。去れば又病重りぬ。故に時々問病けるに彼山伏餘人の目には見へねども。彌右衛門が目にも見えて去れど云勢をなせり。終は彼の人を殺しけるとぞん。彌右衛門は少しばかりの芳心故に疫神の難を免れける。一奇怪の事あり。○因みに記す泉州堺の浦の漁人。或時に網を引けるに魚の一もか、らで。蚌蛤ほどの石四五斗ばかり羅りてあがりぬ。其の石を見るに或は梵字或は漢字を一字づ、書るなり。徳の字。得の字。勝の字。觀の字等にて皆妙筆なり。文字の數四五万もあるべし。何人の所爲なることを知らず。既に石あれば海底にあるべければ

網に入るべき由なし。昔しの高僧の經を書て沈め玉ふか。魚の變じて文字となるか。文字變じて石となるか。諸人聚りて見れども知る人なし。各拾ひて家に歸りけり。上古より是の如き怪あること著聞集に記せり。來由を知れる人あらば幸に辨せよ

◎第百一 世伯死して多く舍利を得る事

播州魚の橋村に三右衛門と云者あり。父を七郎兵衛と号す。禪宗に歸依して常に坐禪を勤めけり。初め沽酒家にて家富けるが吾が和上延寶五年の春播州國分寺にて。梵網經を講せらる、を聞て沽酒を止けり。世間の沽酒を止る人の沽酒の名代を人に賣て止む。是れ教他の沽酒なりとて。名代を滅して賣らざりけり。後に剃髮して隱居ま世伯と号す。子二人をも曾て出家せしめたり。自ら家富みければ乞句人をも憐れみて能く施す。されども思はく我富みて施すは眞實の施にはあらずとて。我が平生三椀食する飯を。一椀減して此を乞食に施す猶思はく我は餓ることなしとて。又一椀減して施しければ。我が食は一椀のみにありけり。天和の末に少し所勞の事ありければ。子どもを呼び集めて曰く。我れ死せば茶毗の後其灰を皆集めて海中へ流せ。若し此の遺言に違せば我が子にあらず。我が茶毗の後設ひ舍利を得とも取ることなかれ。他人に見せしむることなかれと。三右衛門遺言を聞て涙を流しけり。さて貞享元年五月十三日に正念にして命終しぬ。茶毗するに舍利數千粒あり

眞白赤色を殊にす。三右衛門遺言に任せて人に與ぬす。世伯が弟に源左衛門と云者あり。火中に手を指入て一抄取りけり。其餘は皆海中に投ぐ。其子蘭庭尼其の舍利少し及び骨佛を持す。餘人の骨佛とは相違して宛る觀音の像に似たり。三右衛門も剃髮して法泉と号す。世伯父子及び源左衛門は予が知己なれば。面旁源左衛門が物語を聞けり。源左衛門も後に出家して諸國と行脚せり。世伯我が食を減して乞食に施す。志しなれば。舍利を得たるも理りなれども預め知りて遺言せしは且つ不思議なり。○又近比或人の母平生淨信にして光明眞言及び觀音經を誦して怠らず。貞享三年に死せり。七年忌に子孫集りて曰く淨信の人には舍利ありと聞。我母勤めて經を誦じ眞言を持す。定て不思議あらんと。骨佛を取出して拜するに。右の肩と思ふ處より舍利二粒分じたり。予前に全身壞せざるは上なり。舌壞せず印壞せざるは其の次なり。舍利を得るは又其の次ありといへるは是なり。本朝にも昔は法燈國師。湛然法師。道海法師。昭元法師等皆茶毗の後舍利あり近比も正信の。老婆生身に耳中より舍利を得たるあり又怪なり。震旦の諸師舍利を得たる人甚だ多し。具に記しがたし。唯し舌壞せず印壞せざるは希なり。全身壞せざるは支那には善無畏及び慧持法師等あり。日域には惟弘法師及び越後の高智法印のみあり。問全身壞せざるをよとせば如來何ぞ碎身の八斛四斗の舍利となり玉ふや。答經にいはずや法身は不

生不滅ありと。法花にも亦常在靈鷲山と説り。是を全身不壞といふ。但し碎身の舍利となり玉ふことは。釋迦如來は北方の不空成就佛大涅槃の徳にして。涅槃を以て衆生を度し玉ふ。法花に曰く爲凡夫顛倒實在而言滅以常見我故而生三橋恣心と是なり。分別聖位經にも亦明に説り。故に入斛四斗斛六斗の舍利となり玉ふ。八國の王及び諸天龍王皆不舍利を諍ふに。優婆塞大臣と云者あり。舍利を三分として一分の諸天に與ぬ。一分の龍宮。一分の八國の王分ち持して歸りけり。今の世に至るまで舍利あるは皆是なり。淨信を起して供養すれば多く分じ。或は又感得するが故に。世も多くして諸の福を植ゆ。智度論に曰く。若し芥子許の舍利を供養する功德無量無邊にして。天上人間に於て無量劫の間福樂を受け。乃至成佛に至るまで猶盡すと。又末法中一字心呪經には如來の舍利末世には變して遂字となるといへり。即ち釋迦金輪の心あり。又智度論に曰く過去の佛の舍利變して如意寶珠となる。即ち地藏菩薩所持の寶珠あり。上に云どころ金輪。如意輪。地藏等内證一昧の義是にあり。猶舍利寶珠の深旨は密家に入て問べし。顯露には記しがたき事なり

通俗礦石集第三 末終

通俗礦石集第四本

◎第一百二 唐の眞表律師地藏菩薩の教授を蒙る事

唐の眞表律師は百濟國の人なり。家金山にありて累世戈獵を業とす。眞表矯捷にして弓矢の上手なり。唐の開元年中に獸を逐の次。田の畝に憩ふ間。柳の枝を折て蝦蟇を貫ぬいて申にし。水中に置いて食せんと擬す。遂に山に入て鹿を逐直に家に歸て。蝦蟇を取ること忘れ。明年の春復獵する時に墓の鳴を聞て水中を見る。去載貫さし所の三十許の蛙猶申にしながら死せずしてあり。眞表時に歎惋し自ら責て曰く。苦いかな何ぞ口腹のためを彼をして年を経て苦を受しひるやと。乃ち柳條を抜て放ち。其より過を悔て即ち自ら刀を以て髪を切て思惟すらく。堂下親を辭し室中愛を割は慈海を離れんが爲なり。何ぞ久しく樊籠にあらんと。終に人里を離れて獨り遠く深山に入り苦到に懺悔して身を擧て地に撲ぐ。山中本より戒師なければ誓願して。彌勒菩薩の我爲に戒法を授け玉はんことを乞ふ。晝夜眠らずして念々無間に勤修す。七日七夜を経て八日の詰旦に。地藏菩薩手に金錫を振みて影響し玉ひ。微妙の音聲を以て慰諭して。爲に發戒の因縁受前の方便を教授し玉ふ。眞表此の靈應を得て歡喜身に偏ねく倍精進すること前に過たり。二七日を経て即ち魔障起る忽ち大鬼神あり可畏の相を現して。法師を捉て巖の下に擲に身傷る、所るなし。

誠に地藏菩薩の加被力にやと喜びて。匍匐して石壇の上にのぼり。倍復精進するに魔障尙
 止す百端千緒なれども。眞表の心ろ金剛の如くにして變せざれば。魔も亦使をうることを
 たはすして去ぬ。第三七日満して。質明に吉祥の鳥あつて和雅の聲を出して鳴て曰く。今
 慈氏菩薩正に來り玉へり。乃ち白雲四方。翻て山川高下あることなく平坦にして銀色の
 世界とある。悲氏菩薩無量の眷屬と共に來下し玉へり。香風天花を吹て繽紛として亂墜
 寔に人間の物にあらず。諸の聖衆威儀陸離として石壇を圍繞し玉ふ。爾時に彌勒菩薩
 くに歩て壇所に至り。金色の手をたれて眞表の頂を摩て、曰く。善哉大丈夫戒を求むる
 こと當に是の如くあるべし。須彌山は手に攘て却くべくとも備が心は終に退かじと再三歎
 して。乃ち爲に菩薩戒を授け玉ふ。眞表身心和悦して宛も三禪の樂の如し。即ち天眼通
 を得たり。躬ら三衣瓦鉢を授けて。名を眞表と賜ふ。乃至未來の衆生の懺悔滅非受戒の方
 法を説玉ふ。事繁多なれば今略す事終て天樂空に響て内院に歸らせ玉ひけり。眞表法師天
 衣を著し天鉢を持す。猶五夏の比丘の如し。道を徇ぬて山を下るに草木皆な低て路を覆ふ
 。飛禽驚獸皆な馴伏して拜す。又空中に聲あつて村邑聚落に告らく。今菩薩山を出て來る
 何ぞ迎奉らざると。時に人民男女。貴賤道俗髮を布て泥を掩ひ。衣を脱て路に鋪く。氈
 屬毼穩足を承る者あり。華細美褥坑に填る者あり。眞表咸く人情に隨て受け玉へり。

乃至常に二の虎あり左右に隨て行。時に眞表虎に告て曰く。吾れ郭郭に入らじ。汝導引
 して。修行すべき處あらば乃ち緩歩して行と。行こと三十里にして一の山坡に至て二虎前
 に蹲踞す。眞表即ち錫を樹枝に挂て草座を敷て端坐す。四方の信士勸めざるに自ら來て
 同じく伽藍を造り金山寺と号すと。僧傳 眞表律師の本慈氏菩薩を見奉て戒を受んことを願
 ふ。然れども若地藏尊の先現して發戒の因縁受前の方法を教へ玉ふにあらすんば。争でか
 彌勒菩薩を感せんや。此偏に地藏尊の利生なり。妙幢禪師の利生記等に三國の因縁古今の
 靈應を出すといへども。只是の一事を闕せり故に今茲に記するものあり。嗚呼濁世末代極
 重惡人ありといふとも。眞表律師の如くに勇猛に懺悔しなば。誰か菩薩の來下を感せざら
 んや。唯一時に世間五欲の境を離れて再び顧みず。勇猛に勤修すること難し。大小權實
 漸頓顯密の教異ありといへども。先塵欲を離る、ことを説り。密教の本有を宗として不
 煩惱の義を談すといへども。諸經軌の中に初心の眞言行者は。日に入戒を受持すべしと
 説き。大日經に十善戒を説れたり。是先づ世の塵欲を止んが爲あり。故に右より修行
 を勵ます人の村落に近かず。深山幽谷に隠れて獨り淨くせり。愁に人の爲に恭敬せら
 れて衆を領し法を説く時は或の名聞利養の爲に其の心を汚されて。自ら出離を得ざるのみ
 にあらず。又人にも益あし。湯を掬して氷に投ずるに翻て氷聚を添るが如し。故に南嶽大

師常^し歎^{たん}じ玉^{たま}のく。我^{われ}一生^{いっせい}に鋼輪^{こうりん}位^ゐに入^いんことを望^{のぞ}みしかとも。衆^{しゆ}を傾^{かた}ずること太^はだ早^{はや}して所^{ところ}求^{もと}むはまど。願^{ねが}文^{ぶん}を著^あして擇^{えら}擇^{えら}擇^{えら}といへり。又^{また}止^と観^{くわん}の十^{じゅう}乘^{じやう}觀^{くわん}の第^{だい}九^くの能^{のう}安^{あん}忍^{にん}に日^{にち}く。智^ち力^{りき}強^{かう}盛^{じやう}ならば廣^{ひろ}く利益^{りやく}すべし。若^もし然^{しか}らすんば當^{あた}に安^{あん}忍^{にん}えて深^{ふか}く三^{さん}昧^{まい}を修^{しゆ}すべし。行^{ぎやう}成^{じやう}せば力^{ちから}ら著^あれなん。化^{くわ}を爲^なすこと晚^{おそ}からず。若^もし名^な譽^よの維^い縉^{じん}利^り義^ぎの毛^{もう}細^{じゆう}を被^かつて眷^{けん}屬^{じやく}集^{じふ}らば早^{はや}く推^おるべし。他^たの有^{いう}徳^{とく}の人^{ひと}に受^うることなかれ。著^あすることなかれ。術^{じゆつ}推^おるに若^もし去^さすして翻^{かへ}て粘^{ねん}緊^{げん}せられば。當^{あた}に徳^{とく}を縮^{ちぢ}め玼^{せい}を露^あはし狂^{きやう}を揚^あげ實^{じつ}を隠^{かく}せ。術^{じゆつ}若^も迹^{せき}を週^{しゆう}れんに脱^{だつ}れずんば。當^{あた}に一^{いつ}舉^{きよ}万里^{ばんり}絶^{ぜつ}域^{いき}他^た方^{ほう}にして相^あひ諳^{あん}練^{れん}すること無^なして快^{こゝろ}く道^{だう}を學^{まな}ぶことを得^うべし。術^{じゆつ}若^も去^さ名利^{めいり}の眷^{けん}屬^{じやく}外^{がい}より來^きり破^{やぶ}らば。此^この三^{さん}術^{じゆつ}を憶^{おも}ひ齒^はを齧^かつて忍^{にん}耐^{たい}せよ。千^{せん}万^{まん}請^{しん}ずるとも確^{かく}乎^ことして抜^ぬがたし。讓^{ゆづ}哉^や。隱^{かく}哉^や。去^さ哉^やといへり。南^{なん}嶽^{たつ}天^{てん}台^{たい}猶^{なほ}是^{こゝ}の如^{ごと}く况^{ごと}く今^{いま}時^{とき}愚^ぐ昧^{まい}の人^{ひと}をや。上^{じやう}古^こ吾^ご朝^{てう}の玄^{げん}寶^{ぼう}僧^{そう}都^と。增^{ぞう}賀^が聖^{せい}。行^{ぎやう}尊^{そん}僧^{そう}正^{じやう}。慶^{けい}縁^{えん}得^{とく}業^{ぎやく}等^{とう}は。皆^{みな}此^この三^{さん}術^{じゆつ}を用^{もち}ひて快^{こゝろ}く道^{だう}を修^{しゆ}せられたり。今^{いま}の世^よにハ絶^{ぜつ}てなれし此^この迹^{せき}學^{まな}びたくこそ侍^{はん}べ。但^たし古^こ人は徳^{とく}を隠^{かく}して環^{わん}を露^あはす。今^{いま}の人は瑕^{きず}を隠^{かく}して徳^{とく}を露^あはさんと欲^{ほつ}すれども。露^あはすべき徳^{とく}なければ種^{しゆ}種の^{しゆしゆ}誑^{かう}惑^{わく}をなす。喻^{たと}へば貌^{かたち}甚^た醜^{みにく}ふして妍^{けん}影^{えい}を鏡^{かがみ}に求^{もと}むるが如^{ごと}し。寔^{まこと}に恥^は死^しをんとするのみ。

◎第百三 讚州白鳥郡安宅の教清が事

讚州^{さんしゅう}白鳥^{しろとり}の郡^{ぐん}に教清^{けうせい}と云^いふ者^{もの}あり。又^{また}け永^{えい}徳^{とく}と号^{なづ}す。曾^{かつ}て一向^{いっかう}宗^{しゆ}にて一^{いつ}寺^{てう}の住^{ぢゆう}持^ぢありけり。讚^{さん}歎^{たん}なんど能^たくして書^{しよ}籍^{じやく}をも閱^みせし者^{もの}あり。寛^{かん}文^{ぶん}の初^{はつ}め朋^{とも}友^{ゆう}を伴^{とも}なひて四^し國^{こく}の靈^{れい}場^{じやう}を巡^{めぐ}禮^{らい}しけり。或^{ある}處^{ところ}にて大^{だい}河^かを渡^{わた}るに教清^{けうせい} 謬^{まう}て没^{ぼつ}溺^{じやく}しけり。然^{しか}れども我^{われ}を救^{すけ}よともいはず。水^{みづ}に順^ませて流^{なが}れけるが洲^すに流^{なが}れ寄^よりぬ。又^{また}其^{その}より偏^{へん}匈^こあがりて伴^{とも}と同じく行^ゆけり。其^{その}時^{とき}財^{さい}寶^{ぼう}をも失^うひけれと取^とり舉^あげんと云^いふ意^いもなし。又^{また}口^{くち}にも苦^く樂^{らく}是非^{しぜい}を言^いはず。何^{なに}の故^{ゆゑ}やらん諸^{しよ}人^{にん}其^{その}胸^{むね}中^{ちゆう}を料^{りやう}り知^しることなし。巡^{めぐ}禮^{らい}終^{しゆう}りて白鳥^{しろとり}へ歸^{かへ}りけるが。我^{われ}が寺^{てう}へ入^いらすまて直^{すく}に安^{あん}宅^{たく}と云^いふ處^{ところ}の海岸^{かいがん}に到^{いた}り。岩窟^{がんくつ}に入^いて臥^ふしけり。妻^{さい}子^し悲^ひ泣^な泣^な慕^ぼして種^{しゆ}々に誨^{くわ}けども聞^き入^いらず應^{おう}對^{たい}せず。抑^{おさ}此^この岩窟^{がんくつ}は北^{きた}は大海^{たいかい}にて播磨^{はりま}灘^{なだ}なり。東^{あづま}は阿^あ波^はの鳴^{なる}門^{もん}に連^{つら}なる。南^{みなみ}は高山^{こうざん}にて日^ひ月の光^{ひかり}も及び難^{がた}し。然^{しか}るに二十^{にじゅう}餘^{じゆ}年^{ねん}の間^{あひだ}だ今^{いま}に至^{いた}るまで彼^かの處^{ところ}に住^すす。或^{ある}時^{とき}ハ鯨^{きんぐわい}波^は起^おて窟^{くつ}中^{ちゆう}に及^{およ}べば波^{なみ}に順^まて大海^{たいかい}の中に漂^{たふ}へども死^しすることなし。又^{また}終^{しゆう}に波^{なみ}の爲^{ため}に打^{うち}あけられて本^{もと}の處^{ところ}にあり。平^{へい}生^{せい}觀^{くわん}念^{ねん}するにもあらず唯^{ただ}臥^ふせるのみなり。人^{ひと}來^きて問^とへども應^{おう}對^{たい}せず。若^もし心^{こゝろ}に稱^なふ時は法^{はふ}の物^{もの}語^ごすることあり。何^{なに}事^{こと}ぞ此^こ處^{ところ}を好^{この}んで久^{ひさ}住^{ぢゆう}し玉^{たま}ふはと問^とは。いやと

よ好むにはあらず。唯聊爾に此に來りて終に癖となれるなりといへり。諸國の風顛漢尋ね行て問へども答へず。語多ければ面きて即ち臥しぬ。又大守の弟松平圖書殿此事を聞いて故に行て訪ひ玉へども又對へず。哀れみて黄芽若干を與ぬられけれども。目にさへ見ず況や手に取るべけんや。傍ある人論して公子の賜さへ思惠厚さに。此は黄金なれば極めて重寶なり頂戴せよといへば。其時教清が曰く重寶ならば汝が取れ。我はいらぬぞとて顧みもせず臥しけり。諸人驚歎せずといふことなし。大守の父龍雲軒公聞て召しけれども行かす。強て馬に乗ければしばく落馬しけり。さるはどに繩にて結び付て行けり。龍雲軒を隔て、見。近侍の者又問しむるに渾べて答ることなし。唯我は知ことなし早く舊の居處に歸し玉は、恩深しとのみいへり。公深く憐みて其心を行はしめ。夏冬に衣服を給ひけり。されども終に自ら被著せず。傍人強て著せしむれば又拒ます。夜に入りて賊來り剽取るに拒ます取らせけり。赤裸になれども人に衣を乞ことなし。頭髮生て蓬の如くあれども剃らず。人強て此を剃に又拒むことなし。天和三年の春三十餘日斷食しけれども死せず。後に人に語て曰く教清定業未だ盡すして命尙在とて。又一日に一度つ、食を乞て食しけり。或人法を問ければ禪宗は面白き法なりといへり。又辭世の辭なりとて書て人に見せける。予生年既甲戌歲 築年曆凡四十九 埋土則掛三人苦勞

爲ニ火葬ニ又費ニ薪葉

我死骸唯噉ニ食糲 鳥群集而宜ニ鳴弔

徳とらず。損をもせざる。いとあみは

苦にもならねば。樂とあもはず

三月朔日

永徳

高松の城下に生武澤素紅と云者あり。舊は武士にてありしが。今は俗にもあらず出家にもあらず。山伏の貌にて居ける。志ざし貞固にして諸宗の名徳にも參じて辯論流る、が如し。本より眞言宗あれば。平生諸眞言を誦じ。世間塵欲の心少あく。心清きこと氷の如く。志し固きこと松に似たり。此の者永徳が事を聞て故に行き。種種に法を問ければ。永徳言けるは法は有知有行の人知れり。城下に實相寺。見性寺。靈源寺。靈芝寺。等の老宿あり。此の人に問べし我は知すとて面きて臥しぬ。素紅も癖者なりければ我は君が風を慕者なり。山に入て寶を取り。海に入て珠を取るは人の心なり。何ぞ靈芝寺等を知ざらん。然れども我好まず唯君が風を慕ふ。若し答へ玉はずば我が長途を勞して來れる志を思はざるの失ありとて。種々に理を盡して言ければ。永徳悦ばぬ色にて問はく。君は何宗ぞや。素紅が曰く。眞言宗なり。永徳が曰く然らば弘法大師の教の如くに行ひ玉へ。即身成佛疑ひあるべからず其の教法をば歸依寺の僧に問へ。今世人を見るに法の有難きことをいは

ずして。好んで歸依寺の僧の非法あることを談す甚だ謔れり。設ひ其の人破戒ありとも所説の法正法ならば。輕慢を生せずして法を聽受すべし。泥中に蓮花を生ず泥を見ずして花を愛し。臭囊に黄金を納囊を嫌はずして金を取るにわらずやと。云て再び答ることなく。鼻甯駒胎如として臥しければ。素紅も歎伏して歸りぬ。素紅は予が知己あれば面會此事を聞り。又予も貞享二年の春高松にありし時。二三の同志と共に永徳が居を訪ふる人の言に違はず少ばかり法の談をあす。永徳が曰く我は一向宗あり。宗の心は一向一心とて万事を放下して念佛するあり。此窟に數珠袈裟直綴も置べけれど。雨の滴に腐れば用ひずとて。其外法談少しばかりせしが。巳の刻に成ければ。人里に食を乞に出ける。吾們も伴なひて竟路語りけり。永徳ひつかしくや思ひけん足ばやに行けり。別る、及で予因縁再會を期すと言ければ。永徳。閻浮の再會何ぞ期せんや。幸に淨土にて相見のみと云て別れぬ。又或人海岸に住すれば水想觀をし玉ふかと問ければ。あさすと答へけり。夜更ては或は念佛の聲すと漁舟の人言けるとなん。予永徳が形を見るに枯木の如し。心を見るに死灰に似たり。法を話するを聞けば邪見の人にわらず。況や素紅に答へける旨道理者明なり。思ふに此者は德隱し狂を擧るるべし。心中の所證推て知ぬべし五塵六欲の境より露のかりも善なしと見たり。是の如く此の世を忘れれば誰人か決定往生せざらんや。黄金は人の欲す

る所あれども目にさへ見す。妻子は人の愛著する所なれども一度はなれて復言はず。中にも死は人の怖畏する所。滿界の財寶も命に代へがたけれども。死を見ること歸るが如し。心中の樂しみいづくぞや。羨しきことなり。今茲五十九歳。現に讚州白鳥郡安宅の海岸に住せり。上古の伏見の翁と同轍の人か。故に今記して後人に貽すのみ

◎第四百四 元魏洛陽の慧凝法師冥中所見の事

支那の慧凝法師は何れの許の人と云ことを知らず洛邑に居す。異藝あることかく正に心戒を修練するのみ。嘗て疾で俄かに死す。七日あつて蘇り冥土の事を語る。初め閻王の前に至るに五人の沙門あり次第に來て罪福を論せらる。一りは寶明寺の智聖法師。平生坐禪苦行するを以て天に生ず。一りは般若寺の道品。涅槃經四十卷を誦するを以て又同じく天に生ぜり。一りは融覺寺の曇謨最。涅槃。華嚴經を講して徒衆千人を領す。瑛魔王の白く。經を講する者は心に彼我を懷て我慢貢高あり。是比丘の第一の羸行なり。今唯試に坐禪誦經せよと。最の曰く貧道身を立て、よりこのかた只講導を好む。禪誦することあはたす。王の曰く司に付せんと。即ち青衣の偉人數輩最を送て西北の黑門に到らしむ。是地獄一りは禪林寺の道恒。檀越を勤めて一切經を作り。佛像十軀を作る。王の曰く沙門の體必ず心を攝め道を守り。志を禪誦に在べし。世事に于らず喧繁を務めざれ。經像を作るとい

へども止他の財物を得んと欲して。貪心即ち起る。既に貪行を長して三毒熾然として煩惱具足す。又黒門に入し。第五は靈覺寺の寶明。自ら稱す未だ出家せざる時。隴西の大守として靈覺寺を造り。即官を弄て、道に入る。禪誦せずといへども禮拜闕す。王の曰く卿刺史たるの日理を曲法を枉て民の財を劫奪す。寺を造るといへども卿が力にあらす。何ぞ此を説くことを勞せんと。又青衣に付して黒門に入らしむ。慧凝の悞て追攝するなりと云て歸すに蘇れり。即ち胡太后に此の事を奏しければ。黃門侍郎徐紇をして慧凝の説に依て。寺の名並に僧の名を尋檢しむるに一も違ふことなし。五僧皆を一七日已前に死す。平生の行業も皆慧凝の説に異なることある。太后稱歎すること久して詔して坐禪誦經の僧一百人を請して。常々内殿に置いて供養す。又詔して比丘の經像を持して街路に在て乞素ことを聽さず。慧凝は是より白鹿山に隱居して道を修す。洛陽の僧此より多く禪を修し經を誦すといへり。僧傳僧訓日記には慧凝を慧凝に作る。智聖を智聰に作る。曇曇最を曇最に作り。道恒を道弘に作り。寶明を寶眞に作る。何か是あることを知らず。寔に以みれば講説するものは。多くは自讚毀他し我慢貢高あり。又多くは利養名譽を貪る。故に地獄に墮せしこと宜あり。但し利名を恐れて講説を廢せば。如來の教法即ち絶ぬべし。講説を聞てこそ我が道心も發れ。講説勸導せずんば誰人が道に入んや。されば當世を利する

には講説にしくはなく。未來を益するは書を著すにしくはなしと古人もいへり。又説ひ坐禪誦經の僧なりとも我慢にして名利を貪らば。亦墮獄を免れじ。講説の僧慈愍の心深く名利の思ひ淺くして我慢を却けば。豈止天堂のみならんや速かき淨土に往生すべし。況や曇曇最の道士姜斌と爭論す。護法の力最大なり。何ぞ一邊のみを見んや。然れども講導は化他は多けれども自行即ち廢すれば。湯を掬えて氷中に投ずるに却て氷聚を添るが如し。南嶽天台の遺訓誠なるかを。而も大乘の菩薩は。身は鏝湯に沈むとも利生を先とするが故に講説を嫌ふべからず。若し自行満足して後に他を利せんと思へば。古の玄寶増賀。今の永徳が如くすべし。名利は鼠の多きが如く。かれどもくさらず。行さきくしにありと。明慧上人の仰せられし寔なるかを。又淨影寺の慧苑法師は教海の明珠あれども。慧恭の但信にして普門品を誦じ得たるに及ばず。隋の明舜法師の釋門の威風にして智度論を講ずるを以て名を顯せども。冥官の福業を徵責するを見に。講解の浮虛誦文是實ありと云。明舜曾て智度論を誦すること六十卷あり。故に安樂を得たり。此より談論を止めて禪誦を勵ますといへり。實に誦經誦呪は皆如來の金口を直に誦す。講解は凡智を以て解し。凡語を以て説く浮虛なること宜なるかを。猶經文は梵を翻して漢とあすが故に少しき浮虛の義あり。陀羅尼の如來の金口を今直に誦す。功德殊に勝れたること知ぬべし。況や漢語は

義淺く梵語は一字多合あり。念佛の功德深きことも皆な梵語にして一字多合なればなり。欽て講説唱導の人に稟す。我慢の心を以て勸説し雷同し。他を破し自を讃じ。名を干め利を貪ることあかれ。名利は鳩毒なり屏けずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず。曇最。道恒。寶明。明舜は皆一時の龍象をれども。既に冥官の責を免れず。況や今時の羝羊をや。誠めざるべけんや慎まざるべけんや

◎第二百五 河州の希勤阿闍梨祕密の益を得る事

阿闍梨希勤字は實乘河州丹北の郡一屋村の人なり。慶安三年三月十八日に生る。性なり柔和温順にして相好備ひる。十八歳の時夢中に人あり真言を授く。夢中に尊ふといへども何れの尊の真言と云ことを知らず。普ねく人に問ふに觀音の真言なりければ。喜んで毎日念誦しけり。後ニ産業の爲に肥前の長崎に行て。酒屋に事ふること二年。主人は能く人を相する者なり。熟視て曰く。汝が在家からは富貴なるべし。出家せば德行比びあかるべし。遂に故郷に歸て父母を養はんが爲酒を醸るに。酒美にして家稍富めり。然れども志し出塵を欣て禮誦解ることなし。延寶四年二月に延命寺に來て出家す。時に年二十七なり。即ち和上に隨て洛西の般若寺に行て給仕し。又泉州の高山寺に到て持念す。秋北に東海を巡りて善光寺等の名利を拜す。冬河内に歸て十一月七日和上は從て菩薩戒を受く。爾

來油鉢傾ふくことなく浮囊堅く惜む。五年二月一日金剛界の壇に入り。學法灌頂を受くるに金剛波羅密を得たり。和上思念すらく此子菩薩心堅固なるべしと。同三月和上播州國分寺并に報恩寺に赴て梵網經及び普門品を講ずるに。希勤同じく隨へり。秋泉州陶器に赴て和上の梵網を講ずるを聞く。同冬十一月和上に從て十一面觀音の一尊法を受。蓋し會て夢中ニ真言を受て持誦すればなり。行法の間靈瑞居多あり。和上法器なることを知て時本不生の實義を開示するま。未だ密教を學ばずといへども曾て聞が如く稍其旨を得たり。六年二月八日大悲胎藏生漫荼羅に入る。前行の満する夜。阿彌陀佛及び二大士の。光明照耀して雲中に現じ玉ふを夢みる。入壇するに果して阿彌陀佛を得たり。夏四月和上讚州多度郡屏風が浦善通寺に赴て法花を講ず。善通寺の眞祖誕生の地なれば誕生院と号す。希勤又隨て講を聞く。然れども性禪誦を好で學問を嗜す。彌堅の幡に入て持誦するに靈瑞又多し。講筵に陪るといへども誦呪忘ることなし。遂に歎息して曰く生死事大無常迅速なり。何ぞ棧々として人間に往來せんや。我れ法花を聞に其の宗歸するところ諸法如幻に出ることなし。然れば則ち講を聞即ち是。閑居して心を息るも即ち是。如是因。如是緣。如是果。如是報。實相にあらずと云ことなし。不如早く阿練兒に就て持念せんにはと。即ち和上に隨て文殊滅淫欲我慢陀羅尼を受て河州に歸る。小西見見桃の幽居に入て如法に修

練すること七七。靈感頗る多し。或夜神あり告て曰く。今阿修羅月宮を捉と。驚て天を望むに月蝕なり。即ち經説の妄ならざることを知る。又境界の中に於て文殊大士瑞雲の中に住し玉ふを拜す。即ち告て言はく。勿見。勿聞。勿念。勿言。勿ニ分別。勿レ住と。希勤聞て身心泰然たり。即ち思ひく六根門を制せよと宣ふありと。又同州金田村の觀音寺に到て大佛頂陀羅尼を誦すること一百日。其の間靈應甚多具に述がたし。又慎て人に語らず。予は其の一二を聞けり。或時魔障起て心沸が如く飛が如し。希勤是魔擄なることを知て。倍勇猛に神咒を誦するに一日一夜を経て。泰然たることを得たり。其より後夜夢の中にも常にも十一面觀自在尊。我が傍に在て共に臥し玉ふを見る。復障碍あることなし。或日陀羅尼を誦じ。竟て禮拜するに。第二度の禮頭未だわがらざるに。道場の中變して廣博嚴淨の世界となる無量の佛菩薩其中に充滿し。寶樹寶池金殿玉樓あり天より諸の名花を雨すと雪の飛が如し。音樂自ら鳴り奇香遠く薫す。道場を出で、少時あつて。傍人語を交るに隨て妙境即ち没す。又眠に在ても淨土の如く。東司西淨に往ども道場即ち現す。其の外瑞應勝計すへからず。七年正月和上尙讚州に在て高松の邑に寓居す。希勤又來て隨ふ。夏四月不動の印契儀軌を受て修行す。十九布字を觀するに飛字に至て即ち火光定に入る。自ら見に舉身一大火聚と成て内外通徹す。身心悅樂すること喻へがたし。又修念の間現

に道場變して廣大莊嚴の殿堂となる。諸佛菩薩都會して灌頂を行せんとして各其の役に充。一人言て曰く不動明王は某の事を作べしと。希勤聲を應して曰く唯と。予傍に在て親り音を聞り。或石壁無碍にして能く見或は人の心念を知る。寔に通を發せるかと思へり。又六月に金剛界の大法を修す。予も亦同じく壇を並べて勤めしが。障雲厚が故に妙境を見聞することあたはず。唯希勤が靈應の端を知のみ。金剛界修行の間靈應前に倍す。或は界會現前し。或は諸佛の法界定に住し玉ふを見る。或は蓮花の車輪の如くあるを見る。又或夜大自在天烏摩妃と共に來て種々に障碍を作んとす。降三世尊奮怒赫如たり。妃の曰く降三世尊此の人を擁護す。燒すことを得ずと遂に去る。時に明王降魔の印言を授く。自後彼の印言を以てしばし障碍を降す。予其の傍に臥せりといへども三世尊を見ず。祇夢みらく障者あつて現す師子の形の如し。しかるを希勤手を以て撥遣と思て恐怖甚し。明日予希勤に語るに希勤上の事を語れり。又夢中にも金剛界を行すること晝の行法と異なることなし。唯夢中には文字觀より始て。諸觀皆軌の説の如くに。觀想成するを異とするのみ。五相成身の時に觀想皆成す。證金剛身に至て全體金蓮花となる。光明照耀して身心悅樂すること三禪の樂の如し。又四禮の西方の禮に身中の微塵數金剛法と成と云に至て。十方法界の所有の塵悉く觀自在尊となれり。其外の觀法皆を成就して妙境無量なれども渾

て他に語らず。予は同時に修法し同壇に灌頂を受。故に其の方が一を聞けり。又八月に一字頂輪王の瑜伽を修す。時に和上理趣經及び祕鍵を講す。希勤此を聽んと欲す。然れども時を尅して念誦すれば餘暇ありとも講を聞こと如何と疑ふ。遂に誓はく是若し法に違せずんば鬘くは一つの瑞を感せん。即ち講を聞の間に佛頂輪王威儀嚴肅にして七寶千子に圍遶せられて現じ玉へり。又聞所の祕密の奧義曾て修中に證せしと。諸聖の開示し玉ふと符節を合せたるが如し。希勤念はく我れ如來の出世に逢ことあたはず。末法惡世に生して邊國にあり。恨みの中の恨み悲みの上の悲みなり。猶鼻祖大師の化を布く時に生じなば復何をか恨みんや。然れども今幸に密教を聽て諸佛の祕密藏を領す。奇なるかな和上の妙辯能深義を演て聖の所説に異らず。佛法の心髓要妙茲にありと。其の日持念の中主藏神寶現して曰く汝ち師の辯を怪しむことなかれと云云。希勤雀躍して予に語る予も亦延命寺の古事を語りて。俱に喜びけり。又一日主藏神一頌を説て曰く。一念一切。一切常住。常住一心。一心堅固。と又無能勝明王常に現して擁護して魔障あることなし。九月和上河州に歸る希勤も隨ふ。又胎藏界の大法を修するに。無堪忍大護常恒に現して擁護す。靈應倍復前よりも多し。冬十二月不動の護摩を修す。八年の春又金剛界の大法を修す。時に世事多して心しばく散動して定に入り易からず。境界の中に於て人あり一の眞言を授く。誦す

るに即ち寂靜なり。明日和上に白す。即ち持國天の眞言なり和上頷して感ず。二月二日兩界の許可を受く。同十三日傳法阿闍梨の職位を受。東寺の深祕唯授一人の印璽皆を傳ふ。三月の末に教興寺に移る。此寺荒廢して年し久し。和上多聞天の祕軌を授けて寺塔の檀興を祈らしむ。修中多聞天王形を現す身相。金色なり。然れども希勤本より厚く如意輪を信ず。故に自ら改めて如意輪の祕法を修す。彼此同去寶部の尊なればなり。教興寺の東西民屋檐を比ぶ。故に喧鬧にして觀行に便りあらず。因て九月十八日一の瀧の幽居を構て居す。其室方丈にたらず榻一つ鐘一つ。常坐不臥日夜に三昧地にあり。或は海嚙に向て理の常在を觀じ。或は月光に對して法界心を悟る。予九年の春故に一の瀧の居を訪みて法話時を移す。希勤語て曰く夢中に佛の來現を拜し。又現に此の居處の淨土と變ずるを見る。是は前方便なり。種々不思議の事ありといへども。十喻の觀を以て著想を生せず。故に比來又妙境少なり。唯日に身心輕安なることを覺ふ。無量の珍寶求めざるに自ら得るのみ。他人の心念を知り還方の事を見るは。外道も亦通あり。誰か是を是とせん。法明道を見こと豈容易ならんや。勤めて精進して懈怠を生ずることなかれ。頓覺成佛神通の乘寔に密教なり。我此界の緣久しからず。早世の後十年にして和上の法大に興らん。檀興も亦成就すべしと。其の外懸款の教誡を受く。同五月小西見の息心庵に移り十有七日に端坐して化

す。歳三十二、遺言に任せて法衣を披著せしめ。西に向て坐せしめて。息心庵の側わきに寢ね夢す。臨終の前曾て知己の僧呼正に語らく。我死期近きにあり。疇昔ちゆうしやくの夜夢らく鶴首つるしゅの船ふねに乗して西をさして行く。地藏菩薩を上首として諸の聖衆せいじゆ棹さして法音を歌詠し玉ふ。其音微妙にして言に宣がたし。淨土に生せんこと何ぞ疑はんや。と希勤出家してよりこのかた才に六年。其間の靈異具さに記しかたし。或は怪異くわいは渡れば人の毀傍きぼうを生せんことを恐る。故ゆゑも悉く記せず。希勤も亦慎まことしんで人に語らず。希勤は予が法弟をれば粗其の一二を開けり。彼の南山大師の天の侍應じどうを感せし。一も他に語ることなし。故ゆゑも大師の在世には世人此を知らず。終南山の隱士孫思邈そんしやくは道宣律師の知己おきとして。謫仙人なれば能く大師の靈應を知る。大師遷化の後に孫真人。人間に傳ふ。故に今に至るまで人此を知れり。孫思邈若し人に傳へずんば誰か此を知んや。希勤が靈應少なからず。予の實まことも季世の孫真人あり。希勤寂して後和上哀慟あいとうして墓誌を撰せんして曰く嗚呼悲矣。夙債未償乎。厭いと惡塵紛ふ乎。忽就とつ松檟しょうけい。我不爭奈。今不任戀惜之情。且爲勸まを後來。略錄りやく三椀さん。事具じぐ別傳。故茲不贅。冀諸學者。勿責しやく鄙拙ひじやく。是非しぜい矜夸しんかう。一在警策しやうさく。云。末章也。希勤右の手の中指。螺文らもんの所に輪寶りんぼうの文あり。餘人は見す予獨り見て驚異す。又曾て予に語らく菩薩の相諸天の相太凡相似たり。唯し菩薩は染汚の色あることなし。欲界の天は欲染の色あるを異とするのみと。又智拳印

等の深義皆を金薩の開示を蒙る。和上一わじつ一いつに聞て驚歎せずと云ことなし。希勤が行狀具さに知れるは唯予一人のみ。故に有信の警策せんが爲に。他人の毀りを顧みず茲に一二を記する者なり

◎第六 和州生駒山般若窟寶山和尚の事

阿闍梨あせり苾芻びじゆ湛海たんかい字は寶山和尚。和州平群郡生駒。都史陀山般若窟。大聖無動寺の開山祖なり。元勢州安濃郡。一色の里の人あり。父は山田氏母は辻氏なり。孕妊の間身軽く誕る。時困惱こんなんあり。寛永六年二月朔日に生る。性質敏穎にして志氣宏邁きゆうまいなり。伎藝ぎぎ學がくはざれども能くす彩畫及び捏鑄彫刻ねつじゆてう甚絶妙あり。耳目の觸る、所ろ長く記して忘れず。蓋し夙智ふくちのなすところなり。且つ敦厚温良質直無偽あり。歳十七にして十一月廿四日洛西の愛宕山に登り食を斷こと一七日。地藏薩埵の冥助を祈る。素より出塵の志しあれども。親族才を惜んで赦さず。正保三年。歳正に十八にして終に薙染して。東武深川の永代寺に居す。周光闍梨を師として密乘を稟受し。朝職暮悔精修苦行すること年あり。恒に大聖歡喜天の法を修す。靈感を得ること甚多し。難波の醫師谷村昌安齋が記せる傳記の中に粗記せるが如し。和尚周光と俱に願を發して八幡宮を營せんと欲すれども。力微にして事成じがたし。和尚自ら恥恨みて跡を異郷に晦くまさんと欲す。時に寛文四年臘八の夜夢みらく。僕ぼく慧多

く集て地を穿つ。和尚怪み間に僕が曰く馬蹄の跡に無量の珍寶ありと。須臾にして白裝束せる神人駿馬に乗て來る。渡邊大隅守譽みをとる。和尚視て訝かるに忽ちに歡喜天女來臨して告て曰く。汝知らずや馬上の神は是八幡大菩薩なり。常に汝が室に降臨して擁護を垂ると。和尚驚て恭敬す。時に神即ち和尚の室中に入て寶珠を現す。光明日輪の如し。珠の中より微妙の音を出して告玉はく。吾は是八幡大菩薩なりと神詫數語あり。又歡喜天告て曰く内陣に神座を營すべしと。即ち周光來て無量壽佛の蓮臺を以て神座を構ふ。而して和尚夢覺ければ驚き立て見るに。現に大菩薩外より内陣に入り玉ふ。尊容を拜するに袈裟を著して僧形なり。高維の互相の御影も亦僧形なり。威儀儼恪にして異香馥郁たり。和尚感に耐す。全身地に投て禮す。是に依て營構を勵ますに珍寶求めざるに。自ら聚る。渡邊大隅守力を合して不日にして落成しぬ。今の深川の八幡宮是なり。其外種々の靈瑞を得ること悉くに記しがたし。和尚永代寺に居すること十七年。寛文四年三十有五にして洛東粟田口歡喜院に移て精修す。花水供を修すること二万餘座浴油供を修すること二千日。其後數をはからず。或は聖天形を現して語す。所有の祈願稱ふこと鐘谷の空しかざらるが如し。不惑の後までも常に天供を修して無上菩提を祈る。天尊形を現して曰く無上菩提をば我知らず。僧都僧正の官を得。帝の師となり。大樹の歸信を得せしめんことは。願はゞ即ち成せしめんと。時に

圓忍律師事あつて歡喜院に來り居す。和尚終に心を改めて菩薩戒を受んとす。毘那夜迦の障り種々起るといへとも志し確乎として拔す。滅罪の爲に不動尊の八千枚を修すること二座。修中に障者明王の爲に追れて又障りをふさす。それより菩薩戒を受けて沙彌となり。泉南神鳳寺の僧房に入る。終に圓忍和上を師として具足戒を受く。鵝珠雪冷かに虎策風高し。四分に法を秉て持犯開遮を明にす。信に鉢喻に同じきことあり。兩部に軌を授て修本遮表を悟る。又燈傳に似たり。既にして衆中の多事なることを好まず。練兒の閑靜を欣ぶ。延寶五年和州の風森に隠れて持念す。曾て千座の護摩を修す。又二百日を期して無言にして。常に禪坐す。便轉の外立つことなし。夏末に至て臂の皮帷子に著て剝たり。然れども二三日を経て即ち愈ゆ種々の感應勝て計ふべからず。延寶七年十月十一日般若窟に移て艸莽を交て茅屋を締でより已來。今に十五年影山を下らず。常坐不臥。日夜に不動尊の呪を持念す。變として伽藍とあれり。觀史陀山。大聖無動寺と号す古老傳へて曰く此山は都率の内院を表す。神仙の窟なり。役小角曾て經行し持念す。俗人漫に攀登は妖殃を受と。又曾て八万枚の護摩を修し。元祿二年の春より十万枚の護摩を修す。比來四年春ごとに常に修す。十万枚の閑食を斷す。常人は八千枚を修するを難事とするに。和尚は十万枚の間難色なし又慈氏軌の説に依て祕密の神藥を服す。白髮還て黒く顔色桃花の如し。常に一

食而穀味を斷て唯蕎麥のみなり。般若窟に來りし初め。一樹下に坐して兩三日を歴。物あり後より來て抱く形甚可畏く手は虹梁の如く皮毛は鐵鍼の如し。和尚眼 瞑氣絶んとす。即ち不動の三摩地に入るに彼が力に十倍せり。即ち障者を伏して論として曰く。我此の山に在て法力成就せば汝們共に苦域を出づべし何ぞ嫌恨するやと。即日法の施を約して去しむ。又毘那夜迦の障百端千緒あり。然れども心金剛の如にまて不動不壞なり。障者或時は可畏の形を現し。或時は靡曼の女身を現して赤裸にして向ふ。或は飲食に隨て身中に入る。若し和尚三平等の觀に入る時は即ち忽爾として去る。是の如くや、亡すれば障碍することば和尚曾て久しく此の天に歸するか故なり初めより此尊を供せずんば。かくはあるべからず或時天又曰く此を去らば大富貴を得べし。此に住せば衣食乏しかるべしと。和尚の曰く食をくは松葉を食ふべし。何ぞ浮雲の富貴を求めんやと。障者怒て去る。終に寺中食乏しくして後には松葉を食すること十日ばかり。徒衆不和合にして。或は諍論し或は出で去る。然れども和上此を屑とせせず。終に衆和して食輪法輪並に轉して今に盛なり。日に慈救の咒六万遍を誦す。若し力を出すとさは十餘万遍を誦じ玉へり。和尚自ら曰く即身成佛現成悉地は掌を指が如し。然れども我一願あつて常に咒を誦すと。人其の意趣を知ることあり。今茲六十有五歳現に生駒の大聖無動寺に住せり。予曾て拜謁すといへども風馬

牛及ばずして久しく光範に拜違す。徒に斗山を仰ぐのみ。○或人疑ふ和尚日に慈救咒十餘万遍を誦すと此は虚誕なるべし。我日夜眠らずして誦するに三万遍には過すと。予答て曰く南人は駝を夢す。北人は舟を夢みす。子が暗短ある何ぞ現成悉地の人を疑はんや。今和尚のみにあらず。上古にも此の例し多し。唐の道綽禪師の日に念佛七万遍を誦す。法誠法師の一夏に法花五百遍を誦す。一日に五遍 餘にあたる本朝の行空法師の一生に法花三十餘萬部を誦す。蓮長法師は一月に一千部誦す。一日に三十四部にあたる基燈法師は日に三十餘部を誦す。眞遠法師は日に三四十部誦せりと。此皆僧史の記する所何ぞ妄ならんや。且つ俗間の藝術も其妙を得る時は得て知べからず。況や悉地成就の人をや。汝強て疑はゞ十五年來和尚の如くに勇猛に勤めて試よ。但し汝が疑のみならず明人にも亦此の疑ひあり。世に傳ふ宋の永明大智覺延師蓋禪師日に十萬遍の念佛を唱ふと。明人疑て試に晝夜眠らずして誦するに六万遍なり。而も南無の二字を除くと。然れども是の人の驗するの我信せず。輪扁が輪を斲るすら其の得意の妙は子にも傳ふことを得ず。況や法に於てをや。若し汝が如く疑はゞ天眼他心等の通。及び法花の五十小劫謂如半日等は如何か疑はざらん。されば無智人中莫説此經とも説り。和尚今現在して自ら言ふ十餘万遍を誦すと。十二万遍の文字を計るに。二百七十六万字あり。法華四十部を計ふれば。二百七十七万五千三百六十字なり。和尚の今に相似たり。

念佛十万遍は唯六十万字なり。甚少しと言つべし。眞遠法師に例せば四十餘万遍は唱ふべきなり。而るを明人の疑へること亦迷へるにあらずや。大日經及略出經等の中に。眞言の阿闍梨。灌頂を行することを説くに。七日に漫荼羅を圖續し。一夜に種々の眞言を誦じ數々護摩を修す。今時初心の人此を如法に修せば二日三日を經とも竟らじ。而も見諦の阿闍梨の能く一夜に修す。又何ぞ疑はんや。室生の慶園上人日課甚多し。五六人分て修すれども及ばずと。是亦疑ふべからず。昔し漢武帝の續弦膠を疑ひ。魏の曹操は火浣布を疑て俱に笑を後人又取る。汝が疑は猶此にも過たり。殆乎笑殺せんとす。和尚靈異甚多しといへども人知ることなし。南山大師を以て準知すべし。後世孫思邈あつて世に傳ふべし。予か聞る所亦居多なりといへども。世に傳ふことは和尚の好まざる所なるべし。故に恐れて記せざるのみ○又和尚三平等の觀に入るに障者忽ちに去ることは。經軌の中に毘那夜迦の障を除くに。皆軍荼利の印明を用ゆ。如何となれば障者の皆な行者の而二の隔執なり。故に一經に本有の三障を除くには一字心の明を説り字は因業不可得の義にして。因果一如生佛不二の義なり。不二ならば何の障かあるべき。又佛成道の時に降魔あることは而二の隔執悉く除く時あればなり。北方の金剛夜叉明王の牙菩薩にして等覺の位なり。而二の執盡る位あれば此を金剛盡菩薩と名け。大悲盡三昧と号す。即ち摧一切魔菩薩あり

○大般若には摧伏一切惡魔菩薩といへり。又又又の字は盡の義。都除の義なり。微細妄執無始の間斷盡る位なればなり。軍荼利明王は南方の笑菩薩なり。南方の自證の覺滿する位あれば而二の隔執皆盡て。不二の平等性智を證するが故に。障者自ら去ること宜あるか。北方は化他の正覺の故に。菩提樹下の降魔の摧一切魔菩薩の三昧あり。南方の自證の覺を滿する位なれば。行者因位の万行を修する時に。必ず軍荼利の三昧に依て障者を降す。又三平等の理に住する時は。障者も我も佛も二なく別なし。譬へば虚空の無分別あるが如し。障者虚空を障へんと欲せば。千万億劫にも是の處りあることなけん。されば軍荼利明王は畢竟して三平等觀を出す。種子。三形。尊形。皆三平等を表せり。顯衆の行人若し魔障起る時は。如幻即空の觀に入るに障者即ち去る。何況や祕密の三平等觀をや。故に護摩を修する時は。三平等觀を以て一大事とす。又一坐の行法初め淨三業より。終り普禮に至るまで。三平等觀を離れぬれば。有相の行とあつて悉地を得ること難し。三平等と者即ち初入三摩耶の時。阿闍梨の開示を蒙る所あり。又は咒字不生中道法界の理と号す。切に勸む眞言持念の人。三平等の妙觀を修習せよ。

◎第百七 祕密念佛並に阿闍梨佛四重祕釋の事

問上に聞ゆるところの祕密念佛と云は又三平等の理乎。答爾なり道範阿闍梨の抄に具さに

記するが如し。今其の要領を擧て頓覺成佛の直道を示し。已心淨土の妙門を開くべし。夫れ凡水刃刃えと者。即ち五智五佛の種子眞言あり。釋經には五佛を一切如來と説り。然れば則ち六字は一切如來の眞言なりと知べし。凡水は大日の種子あり刃刃えの次での如く四佛の種子あり。大日經の開題に曰く。梵本には一切の經の首に如是の二字の上に。音凡水の兩字あり。是歸命の義あり歸命をば無量壽佛は名く。歸は即ち能歸依の人なり。無量壽と者法身の常恒不壞の徳是なり。身虚空法界に遍し。心性相理事に亘る。此身此心何れの處にかあらざらん。故に歸命と名くと取意此れ歸命の句を中央の毘盧遮那本有常恒の壽命とす。故に凡水は即ち大日の種子眞言なり。此の能歸命の我の。即ち本地法身の如來なり。蓮花三昧經に歸命本覺眞法身。常住妙法心蓮臺。本來具足三身徳。三十七尊任心城。普門塵數諸三昧。遠離因果法然具。無邊徳海本圓滿。還我頂禮心諸佛と。説も能歸命即所歸命なる義あり。我か胸中に肉團あり八葉圓滿せり。是心の藏なり。中に悉多心あり。息風の根本にして即ち壽命の體なり。此を唯心の彌陀と号す。即ち本有不壞の壽命法身毘盧の體あり。此心に無量無邊の功徳を具す。金剛界の曼荼羅は此を表せり。肉團心を即ち已心の淨土と号す。勢至の此を印に顯し。觀音は此を契に持す。胎藏界の曼荼羅は此を表せり。是を六大法界體性と名く。蓮花三昧經の二頌八句の正しく此心を讚せり。此心外に

現はる、時に凡水刃刃えの聲を成す。故に聲即ち心。心即ち聲聲即ち佛。佛即ち淨土。淨土即ち法界。法界即ち我。我即ち法身。我即ち南無阿彌陀佛なり。平等平等にして異なることなし。阿彌陀佛稱名を本願とし玉ふも亦是の義なり。蓮花部と号し。法部と名け。智慧門と稱を改め。成菩提と言を替。妙法蓮花に語を譲り。人中の芬陀利花に目を隠す。皆を自心にして異なることなし。此心の六大にして一切處に遍せり。されば安樂都史本來胸中なり。我も六大。衆生も六大。佛も六大。聲も六大。字も六大。實相も六大なれば。三三平等にして無障無碍あり。此三平等の心に住して念佛する時は眞言と同し。即ち一遍の念佛不可説。不可説轉の念佛となる我が身中の微塵數及び法界の微塵數各一遍を唱ふ。其の一一の塵に各一切の塵を具す。一切の塵を具しながら。又一切の塵に無碍渉入す。其塵又一切の塵に渉入するが故に。重々帝網にして一即ち一切。一切即ち一なり。凡情を以て量るべからず。此を能歸命の我即ち所歸命の佛なりと云。覺て上人の我心即ち衆生即ち我我無我。一我眞我ありと云は是あり。又凡水刃刃えの一一の聲。一一の字に。各不可説の聲字を含せり。故に一遍を唱ふるに即ち三世十方法界の。一如切來三乘の賢聖の所説の經咒を唱ふるに同じ。又我れ唱ふるに即ち三世十方法界の。十界の有情一時に誦するあり。阿彌陀の眞言一遍を誦すれば阿彌陀經を不可説誦するに同じと。陀羅尼集經に説るは。是

の義を以てなり。豈甚深祕密にあらずや。又功德無邊ならざらんや。故に此教に依て修するものは。三大僧祇を一念の刹字に纏めて即身に成佛す此を頓覺成佛神通乘真言陀羅尼宗と号す。顯乘の行人は淨て此等の義を知す。故に淨土に生じて後に無量百千の陀羅尼門を得といへり。祕密の行人は現世に諸の陀羅尼を得るが故に速疾あること知ぬべし。抑此陀羅尼に文義忍呪の四ありといへども。呪陀羅尼の聲字實相を得する時は。即ち餘の三も皆得。故に大佛頂には總集百千旋陀羅尼。性海都攝一切明王と題せり。今凡水の二字の祕密義を少分記す。凡水又凡入の六字を。字相字義旋陀羅尼門等と約して談せば。劫を歴ども盡しがたし。唯し見諦の阿闍梨に隨て受學せよ○又阿彌陀佛の祕密を述るに四重の祕釋あり。一に阿彌陀佛と者。昔し因位に剛提嵐界に於て無淨念王として。寶藏佛の所に於て無上道心を發し。次に寶藏比丘として世自在王佛の所に於て四十八願を發し。願滿して成佛し。今現に西方の極樂國土に住して。有縁を引攝し玉ふ佛なり。是悲華經。雙卷經等の所說にして。顯家に歸依する所の阿彌陀佛なり是を淺略とす。二には此阿彌陀佛と者大日法身普門功德の中に於て。金剛の五智には妙觀察智。胎藏の八葉には證菩提門あり。是兩部大經の所說あり。一切如來の德を總て四佛として。其中の一德あれば。顯經の所說と大に殊なり顯教の意は十方の諸佛各別に於て。因人の修行して果を證せるなり。密教には

十方の如來四重の曼荼。皆是一行者の顯得の德あり。是を深祕とす。三には此阿彌陀佛と者。即ち大日法身三世常住の慧命なり。是を無量壽と号す。又胎藏の中胎百光遍照の大日なり。故に彌陀即ち大日一門即ち普門あり。是を祕中の深祕とす。四には此阿彌陀佛と者。即ち一切衆生の色心の實相。性淨圓明の平等智身あり。上に云所の胸中八瓣の心蓮は。即ち彌陀三點の曼荼なり。無明の淤泥に淪ひといへども染にあらず。隱にあらず。始覺の日光を得て發藥開敷すれども生にもあらず。顯にもあらず。三際不變にして万德湛然あり。此を祕秘中深祕とす。名号國土等の四重是に準して知ぬべし。顯乘の祖師は唯初重の意に依て乘顯往生の義を立つ。大智律師等は自性彌陀の義を立といへども。是理性の膚說にして事相の極談にあらず。今真言行人は四重の秘意を知て。顯密兼ね通じ四身圓證す。此の中の後三重の名号の直に真言なれば。稱名なりといへども常途淺略の義には同せず。問然らば真言行者は初重の説。悲華無量壽。及觀經。彌陀經等の説を用ざるか。答然らず皆を用ゆるなり。諸經論中往々有斯義なれば佛語の圓にして顯經の中にも皆說玉へり。十六想觀等皆祕密の意なり。定善の十三は胎藏の十三大院を表し。散善の九品は金界の九會を表す。又十六想觀の金の十六大菩薩を表し。三輩往生三福。三心等は胎の三部を表す。又人中芬陀利花等の文。全く祕密を説り。况や復梵本の初に。悲華。雙卷經等にも。如是我

聞の初にの凡水二字あり。此二字無量壽命の躰。色心實相の平等智身なり。又梵本の一の文字。字義眞實の門に入て見る時は。法身自受法樂の說にして。咒字第一命の本不生際にあらずと云ことあり。密家より見る時は四重の秘義皆漏れず。顯家より見る時は唯初重の分域にして後の三重を知るとなし。故に十八會の指歸に曰く愚童復無智。不知此理趣。餘處而求佛。不悟此處有。十方世界中。餘處不可得。心自爲等覺。餘處不說佛文顯人は色心實相の彌陀佛を知らざれば。今の文と全く同じ。其餘の深義は道範阿遮黎の抄の如し。故に煩はしく茲に贅せず。

◎第百八 大佛頂陀羅尼功能の事

佛祇洎精舍に在して人天の爲に説法し玉ふ。時に波斯匿王父の王の諱日に當て。齋を營んで佛を請じ奉る。城中の長者居士同時に僧を請す。佛文殊に勅して菩薩及び阿羅漢に分領して請に赴かしむ。唯阿難のみ先より別請を受て遠く遊で還らず。其日鉢を持して次第に乞食する次で姪肆を經るに。大幻術の摩燈伽女と云者あり。阿難の相好端正なるを見て即ち染心を生して。娑毘迦羅が先梵天の呪を以て阿難を姪肆に攝入し。姪躬撫摩して將に戒體を破せしめんとす。戒因緣經の説は少異なり。如來遙に知しめして。頂より百寶無畏の光明を放ち。光の中に千葉の寶蓮花を出生し。佛の化身坐して大佛頂陀羅尼を説玉ふ。即ち文殊に勅して

呪を以て護せしむるに惡呪術消滅して。阿難及び摩燈伽女を將りて佛所に來る。佛阿難に告玉はく汝宿世に摩燈伽と歴劫の因縁恩愛の習氣あり。一生及び一劫にあらず。我一たび佛頂の呪を説に愛心永く脱して阿羅漢となる。彼尙姪女にして修行に心をかけれども。神力冥に資けて速に無學を證せり。云何ぞ汝等在會の聲聞。最上乘を求る者。決定して成佛せんこと。譬へば塵を以て順風に揚るが如し。若し法の如くにして六時に行道して。三七日寐すまて此陀羅尼を誦せば。佛即ち身を現して摩頂安慰して其をして開悟せしめ玉ふべしと佛種々に修行の方法を説き。建壇の儀軌を示し玉ふに。阿難歡喜して又再び如來に此の大佛頂陀羅尼を説玉ふとを請す。會中の大衆皆同く禮を作して佇つ。爾時に世尊肉髻の中より百寶の光を放ち。千葉の寶蓮を涌し。化佛寶花の中に坐し。頂より十道百寶の光明を放ち。一一の光明皆な徧なく十恒河沙の金剛密迹を示現して。此陀羅尼を説玉ふ。○説竟て阿難に告玉はく。是の佛頂光聚悉怛多般怛囉祕密伽陀微妙章句は。十方一切の諸佛を出生す。十方の如來此の呪の心に因て成佛し。諸魔を降伏し。外道を制し。寶蓮花に坐して微塵の國に應じ。大法輪を轉じ玉ふ。十方の如來此呪の心を持して。十方に於て摩頂授記し。諸苦を拔濟し善知識に事へ玉ふ。此呪心を行して正覺を成し菩提樹に坐し。大涅槃に入り玉ふ。若諸の世界の所有の衆生。此の咒を書寫して香囊に貯へて誦すること

あたはずば或は身ヲ帶して守りとし。或は宅中に安置せば。一生の間一切の諸毒其人を害することあたはず。若末世の衆生能く自ら誦じ。他に教へても誦せしめん人は。火を燒くことあたはず。水もあばらすことあたはず。毒も害することあたはず。天龍鬼神魔魅の惡鬼も著ことあたはず。咒詛厭疊及び毒藥も此の人の口に入らば甘露の味となるべし。惡星惡鬼神惡人及び毘那夜迦諸の惡鬼王も障碍することあたはず。却て常に擁護すべし。此の陀羅尼に八万四千那由他恒河沙俱胝の。金剛藏王菩薩の種族あり。一一に皆金剛衆あつて眷屬たり。晝夜此の人を擁護す。設ひ散亂の心にても心に憶し口に持せば。是の金剛王常に隨從すべし。何に況や菩提心決定の者をや。未來に藥叉羅刹餓鬼等の惡處に墮せじ。若は讀誦し若し書寫し若し帶して供養せば劫々に貧窮下賤の處に生ぜじ。縱ひ其身に福業をあさずとも。十方如來の所有の功德を。悉く此人に與へ玉ふ。故に恒河沙阿僧祇不可說不可說劫に。常に諸佛と一處に生じて。無量の功德永く分難なからん。破戒の人を戒根清淨ならしめ。無智慧の者には智慧を得せしむ。此呪を持する時は設ひ禁戒を犯せりとも。持呪の後には破戒の罪輕重問ことなく。一時に消滅すべし。設ひ酒を飲み五辛を食噉し種種の不淨ありとも。一切の諸佛菩薩金剛天仙鬼神以て過とせじ。不淨の衣を著すとも一行一住悉く清淨に同じからん。又壇を作さず道場に入らず行道せずとも。此呪を持せば還

て入壇行道の功德に同じからん。若し五逆無間の重罪。比丘比丘尼の四重八重禁を破するも。此呪を誦せば猶猛風の沙聚を吹散するが如く。悉く皆な消滅して更な毫髮もなからん。又無量無數劫より已來の。所有の一切の輕重の罪障前世より未だ懺悔せざるも。此呪を身心に帶し住處に安せば。速に滅せんこと猶湯の雪を消するが如くあらん。久しからずして無生忍を悟ることを得へし。又女人あつて男子女子を求めんに。此呪を念じ或は守りとせば。福德智慧の男女を得べし。長命を求むる者は長命を得。果報を求むる者は念に隨て即ち得べし。命終の後十方の淨土に生せんことを願はば。願に隨て往生すべし。必定して邊地下賤の身を受けじ。况や雜形生をや。諸の國土州縣聚落に疫癘刀兵賊難一切の厄難災殃のらんに。此呪を書寫して城の四門の上へ或は各各の身に帶し。所居の宅に安せば。一切の災厄悉く皆な消滅せん。風雨時に順じ。五穀豊かに登り。百姓安樂あらん。又惡星の災起らず。柵械枷鎖其身に著す。晝夜安眠して惡夢なからん。此娑婆世界に八万四千の災變の惡星あり。二十八の大惡星を上首として。復八の大惡星を其主とす。種々の形と作て世に出現し。能く種々の災異をなせども此の呪を有つ處には。悉く皆な銷滅せん。十二由旬結界の地と成て諸の災異永く入ることあたはず。未來世の諸の修行者我が壇場に依て如法に戒を持し。此呪に於て疑悔を生せずして修せん。是の善男子此父母所生の身に心通を得ずん

ば。十方の如來即ち妄語となり玉はん。佛是の語を説玉ふ時に會中の無量百千の金剛。一時に佛前にして合掌頂禮して白さく。我當に誠心に是の如くの修菩提者を保護すべしと。又梵王帝釋四大天王。又同じく其人を保護して。一生の所作願の如くならしむべしと。又無量の藥叉大將羅刹王。及頻那夜迦。諸の大鬼王等佛前に於て誓願すらく。是人を護持して菩提心をして速に圓滿することを得せしむへし。復無量の日月天子。風師。雨師。雲師。雷師。并に電伯等。年歳巡官諸星眷屬あり。佛に白して言さく。我も亦是修行の人を保護して。道場を安立せん。所畏なきことを得せしめんと。復無量の山神海神一切の土地水陸空行万物の精祇。并に風神王無色界の天あり。又同じく誓願すらく。我亦是の修行の人を保護して。菩提を成ずるにいたるまで。あがく魔事なからしめんと。爾時に八万四千那由他恒河沙俱胝の金剛藏王菩薩。佛足を頂禮して佛に白して言さく。我等久しく菩提を成ずれども涅槃を取らず。此呪に隨て末世の正修行者を救護せん。修行者若は道場にあり及び餘の經行。乃至散心にして聚落到に遊戯せんに。我等常に當に隨從して此人を侍衛すべし。縱令魔王大自在天。其の方便を求むとも。終り得べからず。諸の小鬼神は此の善人を去ること十由旬の外をらん。若は惡魔若の魔の眷屬來て此善人を侵擾せんとせば。我寶杵を以て其の首を殞碎して。猶微塵の如くならしめんと。又阿難に告玉はく。若し人有て十

方の虚空に遍滿して七寶を盈滿し。持して微塵數の諸佛に奉上し承事し供養して虚しく度ることなからん。是人の功德多しや否や。阿難答て曰く。虚空無盡にして珍寶無邊なり。昔し衆生あつて佛に七錢を施すに猶轉輪王の位を得たり。況や復此の人の功德は却を窮めて思議すとも尙及ぶことあたはじ。更に邊際あることなしと。佛阿難に告玉はく。佛語は虚妄なし。若し人あつて。身に四重十波羅夷罪を具して。瞬息に此方他方の阿鼻地獄を經。乃至十方の無間を窮盡して。經歴せずと云ことなからん。能く一念を以て此法門を未劫の中に人に開示せば。是の人の罪障念に應じて銷滅して。其の所受の地獄の苦因を變じて安樂國と成すべし。淨土に生ずるなり。福を得ること前の施福に超越すること。百倍千倍千万億倍にして乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。我此呪を持つ功德を廣く説んに。劫を窮むとも盡じ。我か教言に依て修行せば直ちに菩提を成して。復魔業をからんと。楞嚴經。又虚空三藏の大佛頂の啓請の法に曰く。此の陀羅尼を誦する者は。持齋せざるものも持齋となり。無戒の人も持戒とある。八万四千の持金剛衆行住坐臥に毎に其人に隨ひ。十方法界の諸如來加持し護念し玉ふ。若一万八千遍を誦し滿すれば。無相定を得べし。僧の二百五十戒を破せる。比丘尼の八重を破せるも。此の陀羅尼を聞念せば。聲聞戒を還得具足すべし。若人常に十惡を行じて罪無邊ならんに。暫く聞の恒沙の罪障皆消滅すべし。現に阿鼻大

地獄に墮すべき人も。菩提心を起して一たび此の陀羅尼を聞ば。永く天に生ずべしといへり。今時の人は罪のみにして善根あることをなし。偏に此の陀羅尼に歸依して或は守りとし或は念誦すべし。○問酒肉葷辛の如來の嚴戒あり。又唐の玄鑿法師は澤州高平の人あり。天性慈仁にして志し清潔を樂ふ。隋の末に賊徒交亂る佛寺僧坊灰燼とあつて。衆僧分散し顛仆すれども玄鑿法師は堅く佛戒を守り威儀飲ることなし。若し飲酒非時食まで濫行ある者を見ては面會詞す。若し用ひざる時即ち酒器を破碎す。故に諸の俗士若し酒飲するに玄鑿の來るを聞ては即ち奔散す。或時寺に繕造ありて工匠多し。故に貴人酒食を遣りければ鑿の曰く寺を修造することは佛法を住持せんか爲なり。寧ろ寺を造せずとも此の非法の物を入れじとて止む又清化寺に佛殿を修營す。合境の民庶共に崇建す。澤州の長孫義酒兩車を送る。鑿時に營造を檢校して此の酒を見て。酒樽を破碎して地上に狼藉たり。而も告て曰く。吾が功德成せざるべくとも。終に此非法の物を用るじと。義聞て大に怒り惱を加へんと欲す。而るに夢中に人あり。大刀を以て怒て義に向ふ。是に依て懺悔して歸依すといへり。武德六年に李錄事と云者あり。死して七日を経て身を隠して妻に謂て曰く。吾は是李錄事あり。計るに吾壽猶六年あり。但可命枉て我を取り。已に閻王に訴へて人中にあることを得。今鬼道に在て未然の事皆預め知る。卿が家貧窘なり。但他の爲に卜せば。必ず

中らずと云ことをけん。妻其の言に従て卜するに鬼爲に疑を通す。遠近皆驚て通力を得たるか。聖人あるかとおもへり。後に妻に謂て曰く人命無常なり。何ぞ福を修せざる。須からく鑿法師の所へ往て法を聽べしと。遂に往て講堂の中に入り壁の角に安置して物を以て自ら障。人と共に言談す應變迅速あり。乃ち二三十日を経たり。或は問者あり何ぞ形を現せざるやと。答て曰く今鬼趣に在て身を受ること極めて醜くし。自らさへ見るに忍びず况復他をやと。又景業寺に往て維摩經を聞。餘法師と云者あり。問て曰く今此經を講する何人の聽ことを感ずるや。李錄事鬼答て曰く。人の頭より已上は皆鬼神あり。其の上は皆諸天あり重級として充滿す。都講文を唱れば諸天神等皆容を歛め耳を傾て聽其聲の絶んことを恐る。法師解釋すれば皆散亂縱恣にして聽受するに心なし。願くは如法に講説して妄り又飲瞰することなかれ。何を以て知るとあらば諸天神仙等法師の酒氣を聞。皆面を回して聽を見ればなりと。因て過を悔て酒を飲まず。鬼の曰く。惟此會のみ獨り諸人を感ずるにあらず。但法事あれば來降せずと云ことなし。輕すべからずと。玄鑿傳聞て倍復信奉して。戒節兢兢たり。毎に涅槃。十地。維摩經等を講して八十餘歳まで四時に輟すといへり。然るに今呪の功能を説には。酒を飲み五辛を食し。種々の不淨等ありとも諸天仙過とせじと言。又或處には五辛を食する者は十二部經を誦すれども益あさ由と説く。一

經に二所の文矛盾せり如何解せんや。答ふ酒肉五辛を食するは既に罪なり。此の罪ありとも能く勤めて陀羅尼を誦せば。恒沙の罪障速疾に消滅すべし。故に諸天仙等過め玉はざるあり。是真言醍醐の教藥諸乘に超過せる事を説あり。又不淨を簡ざるは利益の少なからんことを恐る、か故なり。是大悲攝取の門なり。食辛酒肉を呵するは。大智抑止の門あり。故に一邊を執することなかれ。若し極めて清淨にせよとのみ説ば。末世の凡夫最上乘に結縁することあたへじ。若し渾て不淨を開せば又何ぞ速に悉地を成せんや。故に身も服も清淨にして戒律犯することなくして。此の呪を誦する時は現世に悉地を得て心通を得べし。若し不淨にして誦する者は但未來の得脱を得るのみ。是結縁機の分齊あり。若し淨信決定の正機の人。必ず如法清淨にして現に悉地を得るが故あり

◎第九 唐の崇惠禪師大佛頂を誦して通を得る事

唐の京師章敬寺の崇惠禪師は杭州の人なり。幼にして徑山の國一禪師を師として禪を學び。又不空三藏に隨て瑜伽三密の教を受けて。常々密觀を修習す。昌化の千頃最峰頂に於て茅庵を結て。専ら常に大佛頂陀羅尼を誦すること數稔。又鹽官の硤石の東山に往て艸庵を結て多く年月を歴。後に落雲寺に往て跡を遷る。俄かに神あり告て曰く。師大佛頂の呪を持するに莎訶を結すること少にして密語圓ならず。莎訶は成就の義なり。必ず満足せよ

。今佛法外教の爲に凌轢せられて危きこと綴旒の如し。師の解救を待のみ。崇惠神の教の如くに莎訶の句を満足して唱ふ。終に神通を得たり。即ち章敬寺に往て錫を挂く。大曆三年戊申の歲。九月廿三日大清宮の道士史華上奏して。佛氏當代の名僧と道士と。佛刀道法の勝負を角べんことを請。是蓋し代宗皇帝の偏に佛法を崇敬し玉ふを嫉んでなり。皇帝敕して許す。史華等東明觀の壇前に於て。刀を架して梯として。史華等のばかりふむこと常の磴道の如し。時に諸人驚歎せずと云ことなし。諸の沙門互に顧みて震ひ懼。敢て登るものなし。崇惠禪師此を聞て。開府魚朝恩に謁して奏し請して。即ち章敬寺の庭に於て梯を立て。利刀の霜雪の如くなるを以て。架を横へ高さこと百尺からしむ。史華が登りし東明の梯は極めて低し。時に朝廷の公貴市肆の居民群り集つて此を見る。崇惠徒跣にして級の下層に登り。利刀を躡むこと平地の如し少も難む色なし。又烈火を踏み手に油湯を探る。鐵葉を餐して飢餓と号し。或は釘線を嚼むこと聲猶跪飴の如し。史華怯懼慙慙して面を掩て退く。其の時に億千万の人異口同音に驚歎彈指す。聲雷響の如し。代宗皇帝中官鞏庭玉を使ひとして宣慰せまひること再三。即ち紫衣を賜。詔して鴻臚卿を授け。號して護國三藏と云ふ。敕して安國寺に移して居しむ。しかつしより聲名德望天下に峻高あり代宗倍尊重し玉へり。世に巾子山の降魔和尚と云は即ち崇惠禪師なり。此本大佛頂の呪を持し三

密の瑜伽を修するが故に。現に悉地を成就せり。而も初めの破孔の句満せざるが故に。闕支分と成て成就せず山神の告に依て支分圓滿して即ち悉地を得玉へり。今の人眞言を誦するに。音韻曲屈。長短清濁相ひ叶ふこと稀なり。慎まざるばあるべからず

通俗礦石集第四本終

通俗礦石集第四末

◎第一百十 定照法師枯木を加持するに再び榮る事

釋の定照法師ハ藤原姓平安城の人なり。仁教法師に法相を學び。仁和寺の寛空僧正に密教を學ぶ。一生不犯の人なり。少小し時一指女身に觸る。我が此の形骸一指染をなす。餘は清淨ならずと云ことなしと云て。即ち指を以て燭として然し。三寶に供養して發露懺悔せり。常に法華及び大佛頂陀羅尼を誦す。山階寺の一乘院に住する時。一の橘樹あり。自然に枯瘁するが故に僧衆伐去んとす。時に定照法師大佛陀羅尼を誦して加持するに。其日即ち萌芽を生じ。六七日を過て枝葉茂りて。漸く花果を生ずること前に倍せり。其の橘樹元亨の時分まで猶在といへり。定照の事は上の卷に粗記するが如し。此の人も極めて如法清淨にせし故に。現に悉地を得たり。豈偏に大悲の開文のみを依憑とせんや

◎第一百十一 玄海法師大佛頂を誦して淨土に往生せし事

奥州新田郡小松寺の僧玄海は。初めは妻子を帶せり。老て後に妻子を弄て、清淨に勤む。日に法華一部。大佛頂陀羅尼七遍を誦す。或時久く寐て起す。夢みらく左右の腋に忽ちに羽翼を生して西に向て飛び去り。十萬億の國を過て七寶の地に到る。自ら其の身を見るに大佛頂陀羅尼を以て左の翼とし。法華の第八の卷を以て右の翼として。極樂界を飛回れば

寶樹樓閣等の無量の莊嚴甚だ愛樂しつべし。爰に一りの聖僧あり。語て曰く今ま汝が來る所は極樂の邊地なり。却て後三日に汝を迎ふべしと。玄海此語を聞て喜で飛び歸ること初の如し。初め弟子等師は已に死せりと見て悲泣するに。玄海漸く甦へれり。爾來彌眞言を念誦し經王を轉讀して。後三年に豫め死期を知て遷化す。彼の聖僧は定めて地藏菩薩なるべし。此の人も初めは妻子を帶せるが故に淨土の邊地を見たり。經王の方。佛頂の德に依るが故に遂に淨土に生せり。經に無間の極苦を變じて安樂國と成すと説る。如來誠諦の言信せずんばあるべからず。寔に僧の身として妻子を帶せるは極無間の罪あり。然るを眞言不思議の力ら能く極樂界に往生せしむ。末法相應の妙法是に過たるはなし。貴ふべし仰ぐべし。受持讀誦せずんばあるべからず

◎第一百十二 高野山教懷増延等大佛頂を誦して往生の事

教懷法師は京兆の人なり。幼にして出家し。興福寺に住し。又山城國久世郡小田原に住す。後に高野山に登りて住すること二十餘年。常に阿彌陀の法を行じ。大佛頂陀羅尼を誦じ。又阿彌陀の眞言を誦す。寛治七年五月廿七日。自ら不動の尊像數百幅を摸寫して開眼供養じ已て。衆僧を勸めて念佛せしめ頭北面西にして寂す。奇雲室を覆ひ天樂遙に聞ふ。延實快遲俱に此を聞き。又南院の維範阿闍梨遷化の時慶念夢らく。無量の

聖衆來て維範を迎ふ。聖衆の中に教懷法師雲に乗きて來ると。是又決定して淨土に生せるが故なり。又増延法師は泉州の人あり。毎日大佛頂及び理趣經を誦し。尊勝陀羅尼二千遍。慈救の呪一万遍を誦す。臨終に至るまで終に退轉せず。永万年十月廿二日に弟子に告て曰く。我寂後追福することなかれ。極樂の中品中生疑ひなしと同廿五日に正念に遷化すといへり。○又遷與上人は紀州の人なり。永万年十二月十六日大佛頂陀羅尼を誦して安詳にして逝す。又圓長法師と云人あり日に理趣經。彌陀。尊勝の呪。大佛頂陀羅尼を誦す。臨終に念佛して眠るが如くに往生すといへり。今世の人念佛の一行のみ淨土の正因なりと思へり。而るに大佛頂等の陀羅尼を誦して往生せる人少あからず。何ぞ偏に心得べき。况や佛說明なるをや

◎第一百十三 大隨求陀羅尼功能の事

大隨求陀羅尼は佛切利天宮に於て説玉ふ。功德廣多あること大佛頂陀羅尼に異なることなし。功能及び受持書寫の法具さに二卷の經に出たり。事多ければ今記せず。○昔し不空三藏再び天竺に往時。南海を離れて訶陵國の界に至るに大黒風に遇ふ。船中の諸人各本國の法に依て祈るに驗あることなし。衆人慟哭して三藏に救護を求む。三藏の曰く汝等變ることなかれど。即ち右の手に五股菩提心の杵を執り。左の手に般若佛母の經夾を持して。

大隨求を誦すること一遍し玉ふに即時風止で安穩なり。又大鯨水を出で、涙を噴くと山の如にして前の患より甚し。諸人又三藏に歸命するに。又同じく隨求を誦じ玉へば即ち諸難俱に息んで師子國に達し玉へり。金剛頂義訣には金剛智三藏此法を作し玉ふ事を記す。今と大に同じ。故に別に出さず。今の説は僧傳によれり。上元の末に肅宗皇帝不豫なり。其の時も不空三藏大隨求七遍を誦じ玉ふに。帝の病乃ち瘳と。三藏大曆九年六月十五日に遷化し玉ふ。七月六日に茶毗するに。舍利數百粒を得たり。八十粒ハ禁中へ進りぬ。其の頂骨壞せず。中に設利羅一顆あり。半は隠れ半は現す。勅ありて本院に於て別に塔を建て、供養せしむといへり。

◎第一百十四 佛頂隨求を誦して邪鬼辟る事 附たり幽靈人に託して回向を望む事

某州某の邑に戸田氏の武士あり。先祖は万石餘の侯たりしが。世替り人去て今は石八百をあん知行しける。累代禪宗にて平生篤信の人ありけり。今媛四人あり。姉は既に人に嫁す。餘は處女にして次に十六。其の次は十四。其の次は四歳。末子の男にして一歳なり。元祿四年の十月に十六歳なりける娘邪鬼の狂疾を受たり。末子も亦何となく病みて命あやかりけり。然るに此の人の祖父の時に家人。田中彌左衛門と云者。過失ありて夫妻。共よ頭を刎られたり。此の田中か靈も亦彼の娘に託して種々の事を言。邪鬼の言と此の田中氏

が言とは音韻各別に聞へけり。種々奇怪の事を言。中にも一二百年も往古の事を具さに語る事見たる人の如し。聞者且怪しみ且恐れずと云ことなし。某の人は邪鬼の所爲なることを知て。山伏を呼で祈らしむるに狂疾いよく重るといへとも効しなし。山伏十人ばかりも來りて祈りけれども少しも効しなかりけり。又滿清寺と云眞言師を頼みて。二夜三日の間修法せしむるに少しも効しなくして。却て三人の娘皆一時に狂じけり。某の人仰天して是我家の滅亡よと悲しまれけり。時に田中彌左衛門が靈某の人に白して曰く。我は田中彌左衛門にて侍り。御息女に託し侍るも少しも惱し侍らざらば。我本罪過ありて殺されたり。而も多くの追福を蒙り侍れば。少しも恨み申す處侍らず。今令媛に邪鬼取著侍るま。其のよはめを見て託せり。我託すれば邪鬼も甚しく惱すことを得ず。又此を縁として佛法の結縁を蒙らんが爲なり。此の邪鬼は山伏及び常の僧の祈禱にては去べからず。火輪の發光寺の阿遮梨を請じ玉は去るべしと。某の人のいよく奇異の思を作し即ち使价を火輪に遣し。轎子を持しめて請じけり。時に十月廿三日の夜半なり。發光寺書を見て明日是より詣るべしと諾して使价及び轎子を回されたり。同寅の刻に某の人の家に歸りて報す。火輪より某までは四里八町の道なれば。性光法師同廿四日の申の刻に至るに。夫妻共に悦びて對面し。病人のありさまを語り今は我家の滅亡とこそ存ずれとて悲しまれけ

り。性光病人の前に至りて見るに主人の語に違はず即ち病人色代して曰く。我は田中彌左衛門にて侍り。令媛の邪鬼の病は關黎の加持にあらざるべからず。關黎勞を憚からず祈禱し玉へ。且つ我か爲に光明眞言の護摩を修して回向し玉は、生々世々有難く御恩忘れ侍らじ。然らば來年予が五十年忌かれども。其の追福にも及ばじ。今夜の寅の刻に邪鬼も我も俱に去るべしと。性光應諾しぬ。さて家内の諸人を集めて諭して曰く。我今夜祈禱すべし。邪鬼何事を言何事を作すとも。對へ玉ふことなかれ。驚き玉ふことなかれ聞ずや心生すれば種々の法生じ。心滅すれば種々の法滅すと云ことを。諸法如幻にして自性あることなし。邪鬼便を得も心動するが故あり。何事にも騒ぎ玉ふことなかれと。即時に供具を辨して襖障子を隔て、大佛頂。大隨求を誦せられけり。さて病人大にあられて。三人の娘の一時に立て手を振。殿様の御江戸下りとして大音にて匂り。髪はすくくと立眼は血の如し。怒れる音笑ふ音。家内隣家に響きたりて可畏と云ばかりなし。近處の人々常には剛ある人も。此の病人の前に來りぬれば。つかみ立る如くになりて恐る、こと限りあり。或は手を拍或は板を打。諸淨瑠璃。說經。小歌。處女の身殊に貴人の令媛などの知ざることを見、しく騒ひて騒がしきこと云つくしがたし。性光はさてこそと思ひて諸法本より不生あり。此等の音聲何より來るやと觀して。一心に大佛頂大隨求を誦せられけり

時に彼主人仰天して此は邪鬼にはあらじ。古狐の所爲ならんと心動轉せり。若宮の神主に肥前と云者あり。能く狐著を治すと聞て。即ち彼を呼て呪せしむ。肥前は知命に近き齡なり。鬚髯甚うるはしくして拂子を挂けたるが如し。肥前來り進むに病人大音にて罵て曰く。汝れ何事をなすやあらをかしや。汝が狐をなぶりたる手にて輒く我を治せんと思ふは實に笑殺するにたれり。汝が祈禱にて去ものならば。汝よりも百倍まさりたる滿濟寺の祈りにて何ぞのかざらん。然れども我のかす。而も汝が分にては何ぞ我を去しめんや。汝れが自慢くさき煩わらみとひなや。早く止よ。止すんば鬚を引ひしらんとよば、りけり。肥前狼狽曰く。我自慢の心あることなしと。病人の曰く止よと云に止ぬは自慢にあらざるや。況や我は發光寺と約束して今夜の寅の刻に去るべし。今發光寺現に祈禱し玉へり。而るに汝れ指すること發光寺も本意にあらじ。早く立されと口をそろへて匂りければ。肥前も閉口して赤唇かき退きけり。さて性光は申の刻より寅の上刻まで眠らずして。大佛頂。大隨求。各三十餘遍誦せられけるが。約束の如く寅の刻に邪鬼去りて。四人の病者一時に平復すること常の如し。一家集りて驚歎の聲洋々焉たり。常の病人は愈て後も尙習氣ありて久しく思ふに。是は四人一同に本復して少も影もなかりけり。末代ありといへども眞言の不思議力ありがたきことあり。彼娘性光阿闍梨に對して眞言を受け彌信を發して改宗して

眞言宗となれり。性光後に寺に歸りて。光明眞言の護摩を修して田中彌左衛門が靈も回向せられたり。病人平復の後。父娘に病中の様子を問に一も知らずと答へけり。此の病人の事を傳聞て。今まで佛法を信せざる闍提の腐儒等。信を發せるものあり。諸人密教に歸信するもの多し。性光は予が莫逆の友なり。此事彼病人の前にありて現に見たる人の談を。而も聞て書付侍るなり。大佛頂大隨求のよく邪鬼を逃くること。經說及び句義と。今の現證とにて能しるべし。殊に滿清寺も同じく密者をれども。無戒なる故乎將爲密教の深奥を解せざる乎。彼は驗しあかりけり。性光は持律の僧にして殊に密教の秘奥を傳へ。明師に逢て不生の觀解を習へる人なり。故に幽靈も此を知りて祈禱及び回向を請たるなるへし。されば同く受け修すとも。明師を擇んで傳授し。持律堅固にして修すべきなり。此の事舊冬の事なれば。人或は疑はん。然れども一も虚誕にあらず。若し強て疑ひ玉は。常に如法に此の陀羅尼を讀誦し邪鬼の狂疾を受たらん人に對して。加持して試み玉ふべし穴賢

◎第一百十五 千手陀羅尼功能の事

千手陀羅尼は。佛南海の補陀落山觀世音の宮殿に住して說法し玉ふ。時に觀自在菩薩。佛に請して此陀羅尼を說玉へり。陀羅尼受持の法。及び無量の功德。經の中に具に說けり開

て見るべし。今其の少分を擧げば。此の陀羅尼を誦する者は。過去無量億劫に作れる。十惡五逆破齋破戒僧物を盜せる罪。淨行の僧尼を犯せる罪等。速疾に滅して餘あることなし。未來には必ず極樂淨土に往生すべし。一日に五遍づ、怠らず誦する者は一切の願望満足せずと云ことなし。又陀羅尼を誦する人は水火盜賊。弓箭刀杖。杵槌枷鎖。疫癘邪鬼等の一切の難あることなし。又觀自在菩薩。諸天龍王。諸鬼神二十八部衆等を遣して。常に此の人を擁護せしめたまふ。若し此人の身に吹あてたる風。又他人に吹觸る時は其の人も皆な一切の罪障を滅して。更に三惡道も墮せず淨土に生すべし。若し此の陀羅尼の名を聞者も無量劫の生死の重罪を除く。或は女人難産からん時にも。此の陀羅尼を誦せば即ち安産を得べし。唯し陀羅尼に於て疑ひを起す者は。罪を滅せずといへども。終に無上菩提の因となる。種々無量の功德佛の辯說を以ても説盡し玉ふことあたはずといへり。本朝に昔より千手陀羅尼を誦して利益を得しこと古記の如し。中華の利益の觀音持驗記の中に明すが如し。深く信を生して歸依し念誦すべし。又此比大坂阿波座堀に一人の信士あり。幼より密宗に歸依して常に眞言を念誦して怠らず。今齒弱冠に及べり。元祿四年の秋母重病を受けて百療効しなし。寔に佛神の力にあらずんば。争てか本復を得ん見へけり。爰に信士孝志厚くして。一心に觀自在尊に祈り。二日の間に千手陀羅尼一千遍を誦じければ。不思

議や母暫く假寐する夢一の山中に至る。忽ちに一人あり。手に弓矢を持して來り與ふ。即ち弓を以て身中の病を射ると見て覺めたり。起居もならず食物も咽を通らざるに爾より心爽かになりて。一兩日を経て病愈ぬ。又此の信士は予が知己にして舊冬の事なれば。其の姓名を茲に記せず。此人の祖母の死せし時未だ童子なりしが。父母親族には隠して。一七日の間に寶篋印陀羅尼一千遍誦して追福しけり。志の程一殊勝なり。今母の病は總て醫師の力に及ばぬ重病なりしに。孝心の感ずる所大士の加被を蒙りて忽ちに愈ぬること。末世といへども陀羅尼の力ら貴くこそ侍れ

◎第一百十六 尊勝陀羅尼功能の事

尊勝陀羅尼の善住天子が天壽盡て七遍畜生道に墮して。後には地獄に落べき罪を除て。壽命を延べ玉ふ因縁に依て説玉へり。種々不思議の利益。經の中に説が如し。昔し佛陀波利三藏と云あり。北天竺罽賓國の人なり。身を忘れて名山靈跡を巡り禮す。文殊師利菩薩の震旦の清涼山に住し玉ふことを聞て。遠く流沙を渡て來る。大唐の高宗皇帝の儀鳳元年に五臺山に登て。虔誠に禮拜し涙を流して聖容を見上らんことを祈るに。倏焉として一りの老翁を見る。梵語をなして三藏に語て曰く。師何の求むる所ぞやと。三藏答て曰く。聞ならく文殊大士現に此の山に住すと。故に遠く天竺より來て瞻禮せんことを求む。老翁の曰

く。師佛頂尊勝陀羅尼經を將來るや否や。此の土の衆生多く諸罪を造る。出家の輩ら亦多く破戒あり。地獄に墮する者は牛毛の如く。淨土に生ずる者の鬚角に似たり佛頂神咒の滅罪の祕方なり。若し經を齎來らすんば何の益かあらん。縱使文殊を見るとも何ぞ能く識んや師西域に還て彼の經を取り來て此土に流傳せよ。即是徧ねく衆聖に奉事し。廣く群生を利益し。幽冥を拯ひ。諸佛の恩を報ずるなり。師經を取り來らば弟子當に文殊の居處を示すべしと。三藏聞已て歡喜して山に向て更に禮す。頭を擧るの頃に老翁の所在を失す。三藏驚愕してますます信を生し。遂に本國に歸り遂に經を取て。永淳二年に大唐に來る。往來十餘年を経たり。即ち救して日照三藏と共に翻譯せしむ。所譯の本は禁中に留めて出し玉はざれば。又梵本を持して西明寺の順貞法師と共に再び翻譯す。佛頂尊勝陀羅尼經と号して世に流布し已て。梵本を持して五臺山に登て終に歸らず。定めて文殊の淨土。金色世界に到りぬらん。大曆中に法華法師佛陀波利に逢といへり。上に記するが如し。此傳來の因縁なり法華法師傳記日本へは我が弘法大師請來し玉り○昔し藤原の常行と云人あり。西の京に住す。或夜潛かに東京の妾の舎に往くに。馬に乗りて一僕のみなり大内の美福門の前を過るに。路の東に炬火を秉て行者あり。其衆二三百人あり。常行は忍ぶ身なれば隠避るに地なし。神泉苑の北門に行て。門の内の柱の下に屏る。彼の炬火を秉て行者此の前を過

る。常行闍看るに皆鬼神なり。或は一服一手。三目二頭。奇形異類甚だ怖るべし。僕主喘氣す。其中の鬼の曰く。人の氣近くありと。鬼の魁の曰く蓋ぞ執り來らざると。時に一鬼門に迫く。主從共に鬼に執られんことを思てかなしむに。鬼走り反て曰く得べからずと。魁者叱て又他鬼を差遣るに。又得ずといふ。魁者怒て自ら赴く。常行等這回は寔に驚れざらんことを怖るに。魁者も亦物に怖れたる躰まで反て曰く。若何ともすべからずと。諸鬼其の故を問。魁者の曰く。佛頂尊勝の咒あり。故よ得べからずと言已て炬火皆な滅て。鬼神共に皆走り散す。常行も女舎に往ずして歸るに。面の色青かりければ。家人怪しみて夜中に何れの處に於行玉ふやと問ふ。常行ありのまに皆語り。我は尊勝の咒を持せず。不思議なりとありければ。乳母の曰。我昔し一りの沙門を請して尊勝陀羅尼を書しめて君が衣領に逢合めたり。是なるべしと。乃ち綻はして陀羅尼を取り出し。諸人禮拜すといへり。二十九尊勝陀羅尼の功は沙石集等に粗見れば。今は略して煩はしく記せず

◎第一百十七 賀州の僧生身に魔道に墮せし事

賀州何れの郡とかやに一寺あり。禪宗にて名高き寺あり。中葉の住持の僧。才名ありて人多く聚り。徒弟頗る多かりき。或時江湖を營みて問答の次に秀句を言けるが心中に甚しく慢じ。代々の祖師の影像挂並てありしを見回して思はく。歷々たる祖師等も這般の秀句を

ば争でか言得べきと。慢心頗りに起りければ。椅子に坐しながら自然と虚空に上りて。終に行方知ずありにけり。弟子共悲泣して至らぬ限もなく尋ね求めければ。所在しれずありぬ。一人の弟子四五年の後。和州の金峯山に上り深山へ尋ね入りしに歎然として逢り。弟子慟哭して如何と問ければ。師も悲哀して涙だ雨の如くに降りけり。さて師弟子に告て曰く。我高慢の故に生身に魔界に墮せり。無量の苦しみあり然れども尊勝陀羅尼の聲を聞時苦患即ち止む。我が追福の爲ならば日に尊勝陀羅尼を誦せよと。弟敬て誦す。然る處に天の童子の如き者挑子に甘露と名づし物を盛て持來れり。彼の僧此を見て恐怖の色あり。天童彼の甘露の如き物を以て。彼の僧の口に灌くに即ち變して洋銅と成て五體身外皆な炭となりて失せぬ。彼の天童は惡鬼と成て忽ちに消て無りさといふ。是正しき事にて。彼の禪寺に今に尊勝陀羅尼を誦すといへり。良とに以みれば慢は五鈍使の隨一なれば大煩惱なり。然るを苟且も秀句を言たりとて。上代の祖師を慢せば。生身に魔民となれること宜あるかな。是禪者の常の癖なり。又講經の僧。論議を好む人並びに慢心多し。慎まざるばあるべからず。昔し東齊の明琛は論議詰難を好みて。蛇勢論を作り。現身に蟒蛇となれり。新羅の順憬は法相宗の碩徳なれども。華嚴經の初發心時便成正覺の文を謗して。生身に地獄に墮せり。夫れ論議は十二部經の隨一にして。外道を破するには便あるべしと

佛家に於て自他宗互に得失を論して誹謗するは却て過を生ずべし。三乘五乘十二部經皆な如來の所説として。衆生を度せんが爲なり。又密教より談する時は。外道の經書までも皆な大日如來無量乘の一なれば棄す。況や三乘五乘をや。而るを今教者は禪を破し。禪客は教を毀り。顯家は密乘を貶し。密人は顯教を輕しむ。有戒無戒皆敵の思を作し。聖道淨土は水火の別を談す。甚迷へるにわらずや。唯衆生の根機万差なれば如來の教も千種なり。我が應ずるに隨て受學して他人を謗し憎嫉を生ぜざれ。況や上代の祖師を輕慢せんをや。明慧傳に記せり。中古已來の碩師多く魔道に墮して重苦を受と。有智の高僧既にかくの如し。況や吾儕羗羊の凡夫なるをや。懼ずんばあるべからず。省みずんばあるべからず。然も尊勝陀羅尼の功能。彼重苦を滅するを聞時は。祕密醍醐の妙用。又希有不思議の勝利にわらずや。彼の常行は我身に帶して。現に鬼神の難を免かれ。此の禪僧は弟子に追福を頼みて冥夜叉の責を脱す。文殊の苦ろに勸め波利の遠く取りしは。偏に是が爲なり。○寶篋印。維尼の功德の千手尊勝の二呪と異なることなし。鼎足の如く。○字の三點の如し。○功德同等にして勝劣あることなし。世に三陀羅尼と稱するも是が爲なり。具には經に説が如し故に茲に記せず

◎第一百十八 密教を知らずして謗する人の事

或人維摩經を講する次に。不動明王を以て鬼道に攝すといへり。密宗台徒座にあつて聞て憤懣を懷くといへるも此謗難を通ずる人なま。予後に聞て笑て曰く。此の老宿禪を善くすといへども未だ密を知らず。故に此の言あるのみ。大日經及び底哩三昧耶經。立印儀軌等の密部に明に説ども未だ見ざるが故なり。又我試に問べし。佛をば何物とかする。三十二相の光儀是なりとやせん。はた六十四種の梵音是なるか。金剛般若の中にいひすや。若以色見我。以音聲求我。是人行邪道不能見如來。と彼の老宿は形を以て求め。音聲を以て求るか。然らば即ち十二面觀音。千手大悲の像等は何の道に攝するや。此老宿未だ密教を學ばざるのみにわらず。又禪をも精せざるのみと。他日講座に於て自ら通して曰く。是我れ自ら言にはわらず。名儀集の中に姑蘇の法雲曾て此をいへりと。予緝て見るに鬼神の部に寶頭盧伽を立不動と翻す。此蓋し相似たるを以て自の非を飾るのみ。密家には大聖不動明王と号す。立不動とはいはず。又自ら梵語各別なり。摩訶阿利耶。阿遮羅囊多。毘你耶惹。此に大聖不動明王と翻す。立印の儀軌に曰く。無邊如來奉事是不動尊大威怒王。復有六十万恒河沙俱胝如來皆蒙教示。得成無上正等菩提。又此の説豈鬼趣の攝ならんや。況や密教に三部あり。金剛部と者皆忿怒の形あり。首楞嚴に八万四千那由他恒河沙俱胝の金剛藏王菩薩と説るは。如來の差別智印にして。皆を金剛部の種族あり。又

光中に於て十恒河沙の金剛密迹を現すと云も是なり。不動明王は即ち金剛薩埵にして無量の持金剛衆の上首なり。又は金剛手とも秘密主とも執金剛とも名く。一切如來の大慈攝取の徳を蓮花部とす。大智抑止の徳を金剛部と号す。又は折伏攝受の二門と名く。各到於實際の尊にして佛徳に等して異なることなし大師の曰く此尊は三世十方一切諸佛之祖師。四十二地一切菩薩之所尊ありと。大佛頂經に我等久しく菩提を成ずれども涅槃を取すと云は是なり。尙無盡の義あり秘密に入て問。如上の明文日月の天に麗が如くなれども見ず知らず。密教を學せずして鬼道と云是謗佛謗法の罪にあらすや。本朝近代の頑才は知らざるも猶理りなり。唐宋元明の諸徳すら密教を知らず。密教は唐の末に衰へ。宋の初めに絶。唯我朝のみ密教相應の地にして今に絶す。昔し宋の替寧僧傳を撰するに。密教を多分聲聞藏教といへり。愚昧謗法の過幾何ぞや。又南宋の清信士。鎧庵の吳克己と云もの。釋門正統を杜撰して密教を方等般若の二時として法華よりも劣あり開會の後には用あしといへり。者俗漢顯密二教の大歸を辨へず。唯台教の五時八教にのみ黏纏して密藏を學ばず。阿鼻の罪を招く。殊に華嚴法華は瑜伽の一會あることを知らず。若し天台大師の時に密教傳りなば。五時の中には法華の時に攝入すべし。然れども密教は淨宗代宗の時金智廣智の日盛りに行はれければ智者此を知ることなし。六波羅蜜經の説に依る時。法華華嚴も尙大乘般若波

羅蜜多藏にして陀羅尼藏にはあらず。故に真言乘のみ唯り最上乘醍醐の教あり。本朝の傳教慈覺。智證。安然等は法花の理秘密は眞言に同じ。法花には妙覺を説といへども行法を説す。眞言は事理俱密なりとて。盛りに密教の義を談せり。唯し近代の台教を學ぶ人は。傳教等の意を用ゐず。宋明の末師の義を盛りに用ゐて。密教の義に暗しと聞く。偏に太息するも足れり。虎關禪師は。禪林の威鳳あれども。鎧庵が僻見を彈せり。不動尊を鬼道と云底の人は言にたらざるのみ。○又或碩師予に問く。密教は外道の法にあらずや。藏經の中に少々經軌の有る。龍樹の昔し外道の梵志たりし時に種々の術を學るを世に傳へ玉ふならんと。予答へずして笑ふのみ。何んとなれば。四答の中に。我與蘊一耶異耶と問ふ時。拾置して答へずといへり。されば最上の醍醐を以て鳩毒に同する問をば答へず。彼名藍に身を庇し僧衆に名を偷んで佛法の大歸を知らず。此等の問を起すこと豈哀しからずや。今世に老莊の見よりも劣れる釋氏多し。博學宏智ありとも何の益かあらん

◎第百十九 日本ハ密教相應の國にして相承絶ぬ謬なき事 附たり慶圓上人の事

夫れ密教は師資傳授して謬りあることなし。龍猛菩薩南天の鐵塔を開て。金薩に灌頂を受てより已來。八祖相承まで今に至るまで三十八代三十九代嫡々相承の血脉絶ることなし。震旦國には久しく斷絶せり。我朝は國を大日本國と号し。神を大ひるめの貴と名け。聖を

遍照金剛と稱して。依正人法相稱。密教相應の國あれば。今に如來祕密の印璽絶ることなし。昔し聖武天皇東大寺を營構し玉ふ時に思念し玉はく。我が國は歷代神に奉す。今佛敎を營むは神意に逆ふことあらざらんやとて。天平十三年に行基菩薩を勅使として。佛舍利一粒を授けて。伊勢皇大神宮に獻せしむ。行基菩薩内宮の南門大杉の下に窟を結て居り。七日を期して持念して勅の旨を告ぐ。第七の夜神自ら殿を開て大聲に唱へて曰く。實相眞如之日輪照却生死之長夜。本有常住之月輪。爍破煩惱之迷雲。我今逢難遭大願。如二渡得船。又受難得寶珠。如二暗得炬。師其持舍利。藏埋飯高鄉。以頼邦家。行基菩薩即ち神勅に任せて。舍利を彼の所に藏め。都に歸て奏するに。天皇大に悦び玉ふ。又謂はく朕行基を廟使とす。恐くは朝儀に協はじと。十一月三日重ねて右大臣橘氏を勅使として。伊勢へ詣せしむるに。同く十五日に行基菩薩の如くに同しく奏す。其夜天皇の夢よ大神宮告て曰く日輪は是毘盧遮那也。帝此の意を得て營興せよと。言訖て日輪の相を現す。光明赫如たり。天皇夢覺て感悦し。行基及び右大臣の奏の妄ならざることを知しめして。終に大佛殿及び金銅十六丈の窟舍那佛を建立し玉へり。毘盧遮那を光明遍照と翻す。即ち日の別名あり大神宮の告に。實相眞如の日輪。本有常住の月輪と云は。兩部の教なり。又難得の寶珠を受と云は。密教の中に舍利を寶珠とすることあり。彼此符節を合せたるが

如し。吾弘法大師。八祖相承の寶珠を以て室生山に埋み玉へり。是偏に扶桑鎮護の爲なり。又吾朝の獨り密教の護持に依て安穩なり。○昔し日藏上人金峰山の金剛藏王菩薩を拜して。因みに天滿天神の居處に至るに。大池の中に島あり。廣さ百餘里。中に方壇あり。壇中に蓮花臺あり。其の上に寶塔あり。莊嚴巨麗人間の有にあらず。塔中に法花經を安じ。東西の壁に兩部の曼荼羅を挂たり。大政天。日藏上人に語らく。天帝我を字して日本大政威徳天と呼ぶ。我國土の一切の疾疫災難の事を主とる。我君臣を憐し人民を傷はんと欲す。又思ふ我が生前悲泣の涙を以て。化して大雨となして本國を浸して水海と爲して。八十四年を経て國土を成立し。我が住城とせんと。然れども此の國は普賢龍猛の。密教を流傳するの地あり。又應化の諸聖悲願力を以て。名を明神に借て諸處に住して。衆生を覆護す。彼の諸の神常に我を慰諭す。我も亦佛教に歸伏す。故に巨害を作さるのみと。是日本は普賢龍猛密教を流傳する國あれば。大きな害をかし玉はずと。されば此の國の安穩なるは皆密教の護持力なり。高雄をば神護國祚眞言寺と号し。東寺を教王護國寺と名く。弘法大師より今に至るまで。年始の御修法怠らず。國家を安鎮せり。又頭北西面。寂するは沙門の常法なるに。不空三藏は唐朝を護持して東首北面にして。帝闕を瞻望して寂し玉へり。諸伽藍に北面なく北門あることなし。獨り東寺は教王護國の寺なれば北門ありて

。眞祖の御影も北よ向ひ玉へり。是國家を擁護し玉ふ故なり。されば國に變ある時は。必ず東寺の佛供の飯破裂すといへり。又上古より朝敵を退治するには皆密供を修して其の驗しあり。具に記しがたし。台密東密の異ありといへども皆神通乘あり。故に日本は密教相應の地にして又皆密教の護持力に依れり。今に至るまで灌頂等の相承血脈絶ゆることなく。世に盛なるは依正人法。相稱ふ故なり。

和州室生龍門寺の慶圓上人は鎮西の人あり。親ら大般若。華嚴。大集。大品。法華。涅槃等の經及び眞言の諸儀軌。并に天台の三大部を書す。日日の念誦讀經護摩修法等怠らず。甚多くて早し。五六人相分て作せども及ばず。多武峯に方等法師と云者あり。狂疾を受て數月差す。慶圓上人を迎へて加持せしむ。上人來て房に入るに。方等法師目を怒らかして厭み。火箸を焼て指著んとす。上人頓語を以て慰誘して菩薩戒を誦するに。狂人微笑して曰く。今ま師の誦戒を聞て我が心己に降ると。上人の曰く公は誰ぞや。狂人の曰く我は覺鑿あり。此の方等法師我を誣て曰く。即身成佛の印言を鑿始めて作れりと。殊に知らず三國相承して。一切如來の肝心。兩部秘奥の印明あることを。我只此の事を言んと欲して屢方等法師に託するのみ。鬼魅の類にわらずと。爾時に慶圓上人の曰く。幸に今名徳と逢奉て未聞を聞ことを得たりと。良久しく法義を談じて狂人病即ち愈たり。又室生山に

屏居すること一千日。還て河邊に至るに洪水あり。河の一方を見るに。高貴き女人衣服莊嚴甚うるはしくして來る。然れども面を露はさず。上人に言て曰く。願くは即身成佛の印明を授け玉へと。上人の曰く大姉は誰人ぞや。印明を授るに必ず名字を稱す我聞んと欲すと。女の曰く我の善女龍王なりと。上人の曰く實に然らば河を渡り玉へと。即ち彼の女暴流の水上を歩いて來る。上人印明を傳授するに女歡喜して曰。我過去の七佛に傳授するに今上人の授くると。一も違錯あることなし。有がたしとて涙を流し玉ひけり。上人の曰く願くは女の顔を見んと欲すと。女の曰く我形甚だ可畏げなり。人間は見ることあたはず。然れども今深法を受く。阿遮黎の尊旨忤ひがたし豈に己むべけんやと。即ち空中に騰るに忽ちに雷電霹靂して黒雲變難たり。雲の中より右の手の小指を出すに。其の爪長さ一丈あまり。五色の光りを放つて倏忽として隠れぬ。上人且つ恐れ且つ喜んで涙漣如たり。彌淨信を増長えて密印の妄ならず。相承絶ざることを喜び。倍々精修苦行し玉へり。

。又舍利の法を修すること一千日あり。結願の日壇の上及び花瓶皆な舍利を出すこと千餘粒なり。諸弟子皆を分ち持して供養じけり。又和州に堯信と云者あり狂疾を受く。凡そ加持する人あれば。大に罵て拳を握りて毆んとす。其の父上人を請す。上人來るに堯信即ち立て恭敬禮拜して曰く。此來愚かある僧。賊巫覡ども。聲を厲して呼號するが故に我れ大

に慢罵す。今日高德の阿闍梨に値遇又幸あり。願くは左右を辟けよ我が夙の志を白さん
 と。上人即ち看病人等を去らしむ。爾時に堯信が曰く。我は先世に僧なりき。灌頂を受ん
 と欲して遂すして死す。餘執猶竭すして鬼趣に生ずといへども。法力の感する所威神力
 ありて苦報あることなし。願はくは慈悲を垂て灌頂を授け玉へど。上人の曰く公何人ぞ
 や。曾て名字をば如何とか申しきと。堯信恥る容あり。上人の曰く已に授受を乞ふ。豈
 名を恥んやと。堯信良久して曰く我は是れ中院の僧都某乙なりと。上人即ち灌頂を授く
 るに歡喜合掌して曰く。宿望已に足れり。吾今去らんとす。深恩何を以て報せんやと。上
 人の曰く我れ世間の事一も望みあることなし。唯し一の願あり。右より碩師宿徳たりとい
 へども。臨終に魔の爲に燒惱さる。汝ち威神ありと云。請我が臨終を擁護して魔障から
 しめよと。堯信が曰く。我が徒がら神力の者三百有餘あり。人の死を伺て燒害をなす。我
 誠めば敢て爲じと言已て病即ち愈ぬ。慶園上人貞應二年正月二十七日に印を結び明を誦し
 て曰く。我口中甚を甘し。甘露を合が如しと言訖て遷化し玉へり。年八十四。預じめ三日
 に死期を知る少しも魔燒あることなし。茶毗の後其地光りあり大さ蓋の如しといへり十二
 是を以て見るに真言の相承は七佛より今に至るまで訛膠あることなし。嗚呼悲いかを末世
 の真言者。忝なく諸佛秘密の印璽を傳へながら。精修練行して悉地を期することあたはず

。徒に口腹を養はんが爲にして正信あることなし。無上の醍醐を以て薄酒に混じ。無價の
 梅檀を以て凡木に買ふ。慧眼永く盲ひて正路を見ることあたはず。今世間の灌頂阿闍梨位
 を受るを見るに。多くは生計の爲にすること猶盲者の衆分の官を受るに似たり。慙すんば
 あるべからず恐れすんばあるべからず。幸なるかな我等夙に密林に入て。同じく七佛已來
 より傳受謬らざる印明を傳へて。手中既に這の摩尼寶を握れり。優曇鉢花の時に。一たび
 現するよりも希れに。盲龜の浮木の孔に値にも超たり。有難くありがたし是此の摩尼蓋ぞ
 早く灰水瑩拭し。高幢に置在して種々の寶を雨し普ねく十方沈淪の有情を利濟せざらんや
 。敬て同志の行者に告ぐ慶園上人のごとき高德も臨終をば兼て用心し玉へり。今の人少し
 き不生の解を生し。一兩節の禪を聞けば即ち曰く生死に自在を得たりと。寔に自在に地獄
 に墮すべきにこそ。出る息入る息待ぬ人の命ち只今をもしらねば。常に用心して忘れざれ
 。兼て佛神にも臨終正念斷除障碍の事を祈り玉ふべし華嚴の文に曰く

願我臨欲命終時

盡除一切諸障礙

面見彼佛阿彌陀

速得往生安樂刹

◎第二百二十 餘慶法師の事

餘慶法師ハ筑前の國早良郡の人なり。常に不動尊の眞言を持念して靈應許多あり。曾て一

の山谷に入るに。遙に鐘の聲聞へければ。靜に尋ねて其所に至るに寺あり。檐端幽にして奇花枝を連ね。珍しき香ひ遠く薫す。一りの比丘あり。法華を讀誦す。見るに年三十可あり。餘慶法師庭の隅に相羊るに。比丘見て凡人ならざることを知て。經を停て問訊し是へとて堂の内へ入しめて互相に談語せり。爾時に餘慶問て曰く。君が年幾乎と。比丘の曰く。一百餘歳あり。餘慶の曰く。先づ經を誦じ畢り玉へ聽聞し奉んと。比丘乃ち誦す。安樂行品の天諸童子以爲給使の句に至て。天童二人忽ちに降る。一人は供を持し一人は蓋を把る。比丘供を分て一分自ら喫し。一分をば餘慶法師に與ふ。其の味ひ甚はだ美あること人間の有にわらず。終に辭して歸らんとす。比丘の曰く。此の地常の人の往來する處にあらず。今日君來つて悦び語ること幸ひ甚しと。餘慶の曰く。路を失て聖境に到るは何の幸ぞや。歸て人間に此事を傳へんと欲す。何を以てか驗しとせんや。時に經の傍に凡案あり願くは惠施されよと。比丘憐む邑ありければ。忽に十童兒出で、凡案を守護す。餘慶は本不動の行者なれば。持念すること須臾くし玉ふに。忽ちに大聖明王形を現して奪ふ。十童兒拒んで與へず。明王力強し。終に其の凡案分て二となる。一半は比丘の處にあり。一半は餘慶持して歸る。其の十童兒は蓋し十羅刹女ならん。餘慶法師後に京に上て藤原大政大臣に謁する次で。圖らざるに空也弘也_{或作二}上人入り來る。相見して談話し玉ふに。空

也の左の手不自在あり。餘慶其の故を問ふ。空也の曰く。我れ稚孩の時。父母相妬む。或時母恚て我を捉て地に投ぐ。爾より左の臂終に順ならず。久く聞く闍梨法驗を得たりと。幸に今日相見ゆ。加持せられれば恩惠厚からんと。餘慶の曰く。一易事なりとて。暫く目を瞑て持誦し玉ふ。大政大臣の家人上下皆羣り集つて見る。餘慶法師乃ち空也上人の手を執て引くに鳴て聲出て、後。屈伸自在あること右の手の如し。空也上人乃ち三拜して謝し玉ふ。相國已下嘆伏せずと云ことあり。時の人謠て曰く。彌陀の病明王の醫亦宜ならずやと。空也をば市の聖とも。阿彌陀の聖とも云が故なり。餘慶法師天元二年に園城寺の長吏に補せられ。四年又法性寺の座主に任す。永祚の始め延曆寺の座主とある。正暦二年閏二月十八日寂す。時の天子より智辯と諡を賜へりけり。四人の神足あり皆當代の名僧あり。謂く勸修。勝筭。慶祚。穆筭なり。餘慶阿闍梨の智證の門人なり。既に能く不動の咒を持して現に悉地を成せり。空也は世に阿彌陀の聖と云といへども。現成悉地は又密乘の事なれば。明王の加護を蒙れり。今の世に現に悉地を得たる人は希なれども。豊除病延命滅除罪障。冥に其利益なからんや

◎第二百二十一 池上の皇慶阿闍梨及び性空上人の事

皇慶法師の橘氏中納言廣相の曾孫。書寫山の性空上人の姪なり。母孕みし時肉五辛を食せ

す。設ひ食すれども皆吐く。皇慶七歳にして睿山に至る時。山下に柿の樹あり。絶て子を結ばず。餘の木は皆を實あり。其地を不實柿と名く。兒問ふ此地何の名ぞ人の曰く不實柿と。兒の曰く然らば何ぞ實あるや。山に上るに茶店あり。陟降の人憩息きて茶湯を飲む。俗此を水飲と云兒又問ふ何の名ぞ。人の曰く。水飲と。兒の曰く。何ぞ湯を飲や。嶽の頂に上るに小竹多あり。兒又問ふ何の名を人の曰く大嶽なり。兒の曰く然らば何ぞ小竹あるやと。幼少の時より敏捷あること凡そ此の類あり。東塔院の靜真阿闍梨。慈覺大師六代の嫡嗣なり。即ち是を師として密教を學ぶ。梵字悉曇研究のすと云ことかく五部三部底を盡して。山門の奧秘を傳へ。法の燈火是に熾なり。然れども尙しらぬ火の筑紫に遊びては。景雲阿闍梨に就て東寺の秘密を傳ふ景雲。皇慶の法器あることを知て殘さず東寺の秘奥を傳へ。又大師の寶瓶を以て瀉瓶の信しとして付す。時に延般法師と云人あり。亦顯密の名匠なり。皇慶と共に景雲阿闍梨に隨て密教を傳授す。皇慶筑前の國背振山に於て安居する時に。延般と俱に法を修する次で驚發地神の眞言を誦して。印手を以て地を按ずに。大地大に震ふ。皇慶乃ち延般を誦めて曰く。無上菩提を成するに至るまで。慎しんではを他に語ることをかれと。又池上の菴に於て舍利を禮するに舍利光りを放つ。四天王寺に詣で、舍利を禮するに。舍利本は三粒あり即ち分して八粒となる。薄暮に一りの童子來る

。貌ち甚だ偉壯なり。皇慶問ふ汝何人ぞ。童子の曰く僕は久しく播州書寫の性空上人に給事せる乙護法と云者なり。或時役夫上人の上供を偷む。我れ忿り耐ず。拳を以て頭を撃に。其人即ち死す。故を以て上人我を驅て去らしむ。故に今師に投すと。皇慶飲食を與ふ。童の曰く願はくは印言を以て加持し玉へ受やすからん。皇慶乙童を數百里の外に使はすに半時ならずして往來す。或は衣を洗がしむるに虚空に曝して桁竿を用ひず。又袈裟を洗はしむるに。震旦日本には清淨の水なしと云て。天竺の無熱池へ往て洗ひけり。其外の靈異甚多し。或時に諸の役夫列坐して戲謔ける次で。各拳を以て輔車を打つ。次第に巡て相ひ授けて乙童に至る。乙童辭して曰く。我若し打たば恐くは其人死すべしと。諸人強て望みければ。乙童爲方なくて柔かに打つに。其人血を吐て殆ど死かんとす。皇慶聞て呵嘖して擯し出す。時に乙童泣て曰く。背振山の地動は堅牢善女天出現の時なり。我れ親り見るが故に此の勝徳を感じて來るに。今又擯出せらる悲いかなと。長曆中に智證慈覺の兩門人相諍ふことあり。朝廷皇慶の德望一山に蓋を以て皇慶を籠む。皇慶の曰く。官事若し急ならば乙童を宥むべしと。爾時に朝廷恐れて強て譴すといへり。寔に乙童又來らば衆人此を何とせんや。○性空上人は六根清淨を得たる人なり。一日背振山に於て法花を誦するに。兒童數人年十四五許。左右に來て同じく誦す。容貞奇麗にして音韶清雅あり。平生神

童二人左右に侍す。一りをば乙と名け。一りをば若と名く。皇慶の所へ來りしは乙護法あり。増賀法師和州の多武の峯に在て。或時私かに念はく。性空法師には播磨杉原多くあるべし。三輪清淨の施なれば我受くべきに。即時に性空護法に命して贈る。増賀嘆して曰く空公は夫れ六根を淨むるか。能く人の心念を知ると。又書寫山に在し時。一夕金剛薩埵夢中に兩部の密教を授く。覺て能く記憶す。或時容山の篤上人書寫山に來る。性空夢の事を説く。篤公聞已て涙を流して曰く。兩界の印明一事を違へず。但し一印ありて予が軌に異なり。然れども夢授甚はだ詳あり恐は軌の説誤れりと。性空は曾て密教を傳ざる人なり。然るに金薩の親り授くることを蒙る。諸人不思議の思をなすといへり。吾朝は密教相應の地あれば。悉地成就の人少からず。又智證。性空。同じく夢に灌頂を受く。是も亦相應の故あり。支那に此の例を悉し。驚發地神の印明は大日經に出づ。胎藏及び地鏡作壇等の法に用ゆ。疑ふべからず。只今の入地神の出現を感ずる程のことはなくとも。なご其の法力通せざらん慈氏の軌に如來の密印は凡人結といへども力用殊ならず。喩へば上手の彫印判を以て押す時は。拙人押せども能く明かに現するが如く密印も亦然なり。召請撥遣等皆な其の用を施すといへり。慶圓の善女龍王を見。皇慶の堅牢地神を感ずる。性空の夢授。覺證の靈託。何も皆な我が三密の教の究竟至極にして。相承の妄ならざることを

示せり。世に一等の人あつて。印明は皆な末師の偽作多しと謗じ。或は有相ありと毀る。其の罪幾何ぞや。印契の功能は顯露に記しがたし。明師に逢て聽受すべし。或人間釋書を讀て曰く。智證は弘法の姪なり。皇慶は又性空の姪なり。豈法種も亦胤あるか。奚ど夫れ叔姪の相似て炬赫たるやと。余が曰く是偶然なるのみ。大覺世尊既に難陀善星の醜名あり。從弟に慶喜の孝ありといへども亦天授の逆あり。堯の子は不肖なつしかども父は聖なり。舜の父は殺さんとせしかども子は孝なり。柳下惠は盜跖を兄にし孔夫子は叔氏を父にす。淵明が五子樂天が二子皆な父に肖す。吾が弘法大師實慧真雅智泉智證の英ありといへども亦表甥の頑俠を免がれず。玄寶の清介なるも道鏡の醜行あり。聖武の神聖なるも孝謙の姪放あり。若し夫れ羅什の父に肖たる班彪が子ある。文王周公の聖。伯夷叔齊が賢。曹丕曹植。蕭統。蕭綱が才。陸機。陸雲。靈運。惠連か智。無著天親。慧遠慧持。善仲善算の操行。嚴母が五子。明遍の諸哥は。我が置て論せざる所なり。

◎第百廿二 地藏菩薩梵号の祕釋 附たり勝軍地藏の事

地藏菩薩梵にはをびろびら(びら)びら(びら)と云。をびは地なり。ろびは藏なり。十輪經及び占察經等に説が如きは。心摧破なきか故に悲願堅あるが故に。普ねく善根を生ずるが故に。苦を救ふこと廣大あるが故に地藏と名といへり。今祕密の釋を作ば地と者列字地大金

剛種姓本有不生の心地なり。本願經に説が如きは。此菩薩は過去の無量無邊不可思議劫の已前に已に果位を證し玉へり。然れども衆生を哀愍するが故に菩薩の形を現じて衆生を救度し玉ふと。此の果位は即是無覺無成の阿字本不生の心地あり。藏者金剛寶藏あり。既に久しく金剛寶藏を開見すれども。度生の爲の故に尙菩薩の位に居す。自ら既に此の位を證して。又人を度して此の心地を證せしめ此寶藏を開かしむ。故に地藏と云。薩婆若平等の心地を以て無盡莊嚴藏大曼荼羅を開發しをはつて却て衆生平等の心地の無盡莊嚴藏大曼荼羅を開發し玉と云は是なり。又悲願金剛と号す此菩薩は悲願深重にして。衆生界を度し盡さずんば正覺をとらじとの本誓なり。故に悲願金剛と云。又大日如來普門万徳の中の悲願の一徳を渾て此の菩薩に名く。悲は拔苦を先とす。本願經の中に罪苦の六道の衆生を拔濟し畢て後に菩提を證せんと誓ふは。一切如來の悲願は皆な此尊の三昧なるが故なり。又大日經の第二に地藏菩薩金剛不可壞行境界三昧に住して。眞言を説玉へり。金剛不可壞行境界は何物ぞや。阿字金剛輪本不生の心地金剛寶藏を指あり。又悲願甚深にして盡る期なく。堅固なること金剛の如くにして。破壊すべからざるが故あり。又三昧耶形は寶幢旗あり。一經には此を金剛幢大軍と説き或は虚空旗菩薩と名く。金剛頂經には一切如來思惟王摩尼寶幢大菩薩と号す。金剛幢大軍と説が故に勝軍地藏と云あり幢旗は大将の持する物なり。淨菩提心は衆行の導主なること。猶大将の幢旗の如し。菩提心の幢旗堅固なる時は。

向ふ所の煩惱の賊天魔の軍に勝すと云ことあり。故に勝軍地藏と号す。金剛不可壞行境界三昧と云も。太公及び韓信が如き大将をば。容易には破壊すべからざるが如く。今本不生の心地に住して。自心の金剛寶藏を開く時は。地獄も天堂も。佛性も闍提も。空有る偏圓も。二乗も一乗も。天魔も波旬も皆自心佛の名字あれば。取るべき物もなく。棄べき物もなし。天魔及び煩惱は自心の功德眷屬なり。彼何ぞ我を壞すべさや。我れ何ぞ彼を破すべさや。此を眞實の金剛不可壞行境界三昧。大力勝軍と号するなり。又一切罪苦の衆生を度し盡して後に成佛すべと云大悲願は。一切に勝出すること。高幢の獨り高く空中に出たるが如し。故に虚空旗菩薩と名く。心。身。智。虚空。衆生。は實に無量なれば衆生界の盡る期なし。故に地藏菩薩の大悲願も亦盡る期あり。盡ることあるは不可壞行境界なり。此又種子の義と申し。阿字は風大の種子なり。大力の義。堅固の義。恐怖の義。摧破の義。成就の義。擁護の義。歡喜の義等あり。大力の義をいは、風輪は能く此の三千界を持し又能く此世界を壞す。金剛杵を以て此風輪を壞すべからざるは不可壞行境界なり。阿字は因の義あり。謂く菩提心を因とす。是則衆行の導主大将の幢旗なり。是の菩提心堅固不動なるは不可壞行境界なり。自分堅固なるが故に能く他を壞す。故に菩提心を發す時は魔宮震動し。乃至菩提を成する時は能く四魔を破す。猶風大の能く世界を持し。又能く世界を壞するが如し。花の開くるも風の力なり。落るも亦風に依る。開落は豈因縁にあらずや。地

藏菩薩此の金剛不可壞行境界三昧に住し玉ふが故に能く地獄を破して群生の苦を抜き。煩惱を壊滅し。二十五有を破し。又能く一毛一滯一沙一塵の善より。漸く増して菩提を成せしめ玉ふなり。若字義に付て釋せば大品及び金剛頂に曰く至字門は盡不可得の故にと。文是大悲闡提の菩薩の不度盡衆生界不取正覺の願なり。佛切利天に居して說法し玉ふ時に此世界他世界此國土他國土の。無量無邊の十界の有情皆な來集せり。文殊の妙慧を以て千劫測度すれども知ることあたはず。如來佛眼を以て觀じ玉へども尙敷を盡さず。皆是地藏菩薩の已度當度未度。已成就當成就未成就の衆生ありといへり。佛眼尙敷を盡さずと云は。至字の盡不可得の義なり。又囑累人天品に。佛地藏菩薩の神力。慈悲。智慧。辯才を讚歎して。正使十方の諸佛汝が不思議の事を讚歎し宣説し玉ふこと千萬劫の中にも盡すことあたはずと説玉へり。此も亦至字の實義あり。然れば則ち此菩薩の願力。智慧。神通。辯才。慈悲。分身等の事皆無盡なる義なり。次に此字は入字を躰とす。入字の如不可得の義なり。大經大品には入字門は入諸法如相不動故にと説けり。地は不動にして十方に邊際なく盡る期あり。故に至字を地と云。是の字義を積んで句義を成するあり。入字の如の義あれば此菩薩既に諸法如如の極際に至り玉へり。故に又一切衆生を度して如如の地に至らしむ。如不可得の即ち入字本不生六大平等の心地。不可壞行境界あり。此點は根本の義なり。

り。六大真如は諸法の根本なるが故に。亦自在の義あり。此尊は眞如實際に於て大自在を得て。恒沙の國土に於て自在に衆生を度して。如實際に至らしむるが故に。次に入字は入二合の字なり。入字を體とす。入字は離作業の義なり。大經涅槃經に曰く。於諸衆生一起大慈悲生於子想。如羅睺羅。作妙善義。是故名入と説けり。作業不可得と者。外道等は作者ありと計す。凡夫及び二乘皆な作業を離れず。此菩薩は久く既に金剛寶藏を開見するが故に。一切の作業を究竟して作業あることなし故に寶藏より一切の珍寶を出して。衆生の願に隨て賜與し。一切衆生に於て一子の想を作して濟度し。皆な最妙善の境に至らしむる義なり。入字の譬喩不可得の義。此菩薩の功德悲願辯才智慧無量不可思議にして。譬喩も及ばざる義なり。又諸法本有にして世諦即ち第一義諦あるが故に却て譬喩を以て法身不可得の境を顯はして地藏と名く。又入字の損減不可得の義あり。此菩薩十方法界に於て百千萬億の身を現じ一一の身に各百千萬億の衆生を度し玉へども。神通智慧に於て損減あることなき義なり。又能く二十五有を損減して。妙善の境界に至らしむる義あり。上の句義の中の能殺能成。不壞能壞の義と同なり。此字は本性寂の義なり。疏に曰く凡夫二乗は少分の憍怕を得るを寂とすれども。然る本性常寂にはあらず。諸法從本來常自寂滅相なり。三界六道何者か是れ涅槃にあらざる。乃至是の法は平等にして高下あることなし常に動ずる

所ろなふして而も爲ざる所ろなし。故に解脱の中には容受する所ろ多しと意諸法高下なく平等にして容受する所ろ多きは菩薩の大悲願海あり。又藏の義也。容受する所ろ多く本來寂靜なるが故に。能く大悲願海這の寶藏より一切の寶を出して羣生を度し玉ふ。此の寶藏の本有無作にして。損減あることなく。譬喩すべからざる如來の法身と衆生の本性とは同じく此の本來寂靜の理を得たり。然れども衆生は覺せず知せず。故に地藏菩薩苦到に此の寶處を開示し玉ふ。是は字義を積で句義を成するものなり。又或は孔氣を藏と云。孔は行不可得の義。即ち金剛不可壞行境界三昧なり。孔は有の義不壞の義なり。又は離塵垢の義なり。是れ二十五有の衆生を度して。煩惱塵垢を除き玉ふ義なり。又不壞は金剛不可壞行境界三昧なり。又行は造作遷流の義あり。孔字の作業に同じ。孔は離塵の義本性常寂なれば。一切の煩惱塵垢の散動を離る、が故に又同じ。孔は有なり。二十五有は皆散動の法なり。今有不可得と知るが故に孔子の本性寂の義に同じ。乃至字相字義に約して祕密を釋せば。劫を歴とも盡しがたし。面にあらずんば何ぞ明らかあらん。見諦の阿闍黎に隨て聽受せよ。故に略して抄せざるのみ

◎第二百二十三 地藏菩薩四重祕釋の事

上は既に阿彌陀佛の四重を明せり。今の釋煩重に似たりといへども。初心の人の爲に再び

記するのみ。幸に鄙陋を責ることなかれ。

第一に淺略と者。此地藏菩薩は過去無量阿僧祇劫に長者の子として。師子奮迅具足萬行如來の御前に於て大願を發し。又聖女としては亡母の墮獄を救ひ。覺華定自在王如來の塔像の前に於て弘誓願を發し。及び清淨蓮花自如來の法の中に於て不度盡衆生界不取正覺の願を發してより已來。千萬億無量阿僧祇不可說不可說恒河沙劫。猶ほ菩薩として。十方法界の中に。各百千萬億の身を現じて衆生を救濟し。八千大千那度多頻跋羅の菩薩と共に南方より佉羅帝耶山に來り。及び初利天宮に來て。世尊慇懃の讚歎を蒙り。如來の付囑を受て彌勒の出世までの一切衆生を救護し玉ふ尊なり。是地藏十輪經。及び本願經。占察經等の所說。聲聞形の菩薩なり

第二に深祕と者。此尊は胎藏界には地藏院の主。金剛界には南方の金剛幢菩薩なり。各寶冠形にして大日如來方德の中の悲願の德を主り玉ふ。是大日經金剛頂經の所說あり。十方法界の一切の諸佛菩薩の悲願は。皆此菩薩に攝するが故に深祕あり。

第三に祕中深祕と者。此尊は直に摩訶毘盧遮那如來なり。地と者本不生の心地。即ち胎藏中臺の大日如來なり。藏と者金剛寶藏即ち金剛界の大日如來あり。本願經の中に普賢文殊觀音彌勒等の菩薩は其願尙畢竟あつて。地藏菩薩に及ばずといへり。是は此密意なり。宜

あるか及はざることを。上の四尊ハ八葉四隅の尊なれば。何ぞ中臺の徳に等しからんや
 第四に祕々中深祕と者。此の尊は直に是一切衆生の色心の實相。本來常住の平等智身なり。
 地藏菩薩ノ字を種子とし。寶珠を持す。此の寶ハ即ち一切衆生の内心八瓣の堅實心なり。
 此の淨菩提心の如意寶を。人々具足し箇々圓成すれども。無始の間隔の爲に蔽れて實の如
 くにしらす。故に地藏菩薩手に持して示し衆生を引攝し玉ふ。又ノ字は因業不可得の義な
 り。因不可得なれば果も亦不可得なり。因果俱に不可得なれば。心佛衆生三平等にして異
 あることなし。又此のノ字は凡心ノ有るか故に。即ち淨菩提心の如意寶珠なり。又ノ
 は因縁の義あり。本願經等に此菩薩ハ閻浮提の衆生ハ於て大因縁ありと云は是あり。此の
 大因縁は何事ぞや。一切衆生の心直に是地藏菩薩の體なるが故あり。又一毛一滯一沙一塵
 の善も漸く度して菩提に至らしむと説は。此心に万徳圓滿せり。此を本有と名く。一毛乃
 至毫髮許の善を得るは修生の初めあり。故に終に本有の三身を顯現し證得せしめ玉ふあり。
 大日經に淨菩提心如意寶滿三世出世勝希願除疑究竟獲三昧自利利他因是生と説は是あ
 り。又肉團心ニ七穴三毛あり。中より通する氣を悉多心と名く。我等慮知分別の心なり。
 此の心外に現はる、を息風とす。息風は即ちノ字風大無量壽命の體あり。衆生界無盡なる
 か故に。菩薩の大悲方便亦復無量なり是を無量壽佛と号し。地藏菩薩と名く。至字の義と

同し。地藏菩薩の聲聞形は。阿彌陀佛の因位。寶藏比丘の貌なりといへり。又ノ字に大力
 堅固不動等の義なり。即ち金剛不可壞行境界三昧あり。又ノ字の中にノの聲あり。又ノ字
 の最初の横の一畫はノ字なり。又口を開く最初にノの聲あり。是諸音の根本なり。次に轉
 して喉内に龍く觸をノと云。摩多の始終はノあり。體文の始終はノの音なり。諸字諸音諸
 法諸義皆此の二字に攝し盡す。是をノ一體の實義と名く。金剛頂經ニ曰ノ字菩提心種智
 之本源是一切字母十方三世佛所說一切法無非此字躰一緣念即同稱一切如來法此性成密
 言三世佛法教皆廣明此字其義說難窮已上ノ字地大本初不生の心地ノ字は風大如意寶
 金剛寶藏なり。所謂唯心の彌陀己身の淨土。寶藏比丘の名義亦近からずや。又ノ字に降
 伏摧破の義あり。勝軍地藏の名義亦宜ならずや。此の本不生の心地を以て見る時は。阿彌
 陀不動愛染等の尊。乃至海會の諸尊皆な地藏尊にわらずと云となく。又赤肉團中を出ず。
 蓮花三昧經に曰く歸命本覺眞法身常住妙法心蓮臺本來具足三身徳三十七尊注中心城上
 普門塵數諸三昧。遠離因果法然具。無邊德海本圓滿。還我頂禮心諸佛。是正しく已
 心の地藏尊なり。遠離因果と云豈ノ字門の實義にわらずや。但し此の法を信解し受持する
 こと難中の難あり。上上決定の信解空々無著の心智にわらずんば。誰が能く難信の法を信
 じ難入の門に入らんや。眞言の中にノ字者三乗の因なり。十輪等の經に説が如し。今

因不可得と知るが故に本有無作なり。○(列)は希有の義なり。一切有情は我想の煩惱あり。裁かに此の眞言を念じ此尊に歸すれば我想即ち除る。此を希有と云。亦是希奇の義なり。○又(不)は三毒煩惱の因あり。○(列)の奇哉怪哉の義なり。佛の常教の如きは慈を以て瞋を對治し。無貪を以て貪を治し。正見を以て邪見を治す。密教は然らず。大貪を以て一切の貪を除き。大瞋を以て一切の瞋を治し。自性鈍の大癡を以て一切の癡を破す。三毒の體性の三部して佛徳なりと覺る。此法門最も難解難信なり故に奇哉怪哉と云。又(不)は笑聲なり。若人才に此尊に歸依し此眞言を持念すれば。一切の願望速疾に成就して歡喜するが故あり。是を幢上の如意寶の衆生の願ひに隨て一切の寶らを雨して饒益するに喩ふ。即ち此位を南方の金剛笑菩薩と名く。敬て十方求佛の客に告く勤めて精進して此の醍醐の妙味を嘗めよ。若し善男善女有て才かに此の門に入れば則ち三大僧祇を一念、孔子に超。無量の福智を三密の金剛に具す。八万の塵勞は變して醍醐となり。五蘊の旃陀は忽ちに佛慧となり。開口發聲は眞言にして罪を滅し。舉手動足は印契にして福を増す。心の起すところ妙觀自ら生じ。意の趣く所等持即ち成る。貧女が穢庭に忽ちに如意幢を建て。無明の暗室に乍ちに日月の燈を懸く。四種の魔軍旗を靡かして面縛去。六境の猘賊黨を率ゐて入附す。心王の國土無爲の樂しみ踵すを旋すに期しつべし。四種法身恒沙の徳即身に

自ら得たり。故に文に曰く於顯教修行者經三大劫難行苦行或得或不。眞言門行菩薩行諸菩薩無量無數劫所積集修行無量功德智慧皆悉成就。地藏祕密の大意蓋し斯の如し。此の己心の地蔵を知らずして自ら種々の業を作て三途に墮すると。彼の無智の繪師の自ら衆綵を以て可畏夜叉の形を描き。描き畢て恐れて地に墜れて苦しむが如く。又暗中に利寶の爲に傷られて。謬て毒蛇なりと思て毒氣深く入るが如し。故に地藏菩薩種々の方便を以て利濟し。地獄にへては乃至其の重苦に代り玉ふこと。未來際を盡すまで休息あることなし。其餘の印眞言三摩地等の奧義無量無邊なり。未灌頂の人に向ては説べからず。明師に逢て問べし。謬見を生ずることなかれ。

一日稱地藏 功德大名聞
 勝俱胝劫中 稱餘智者徳



